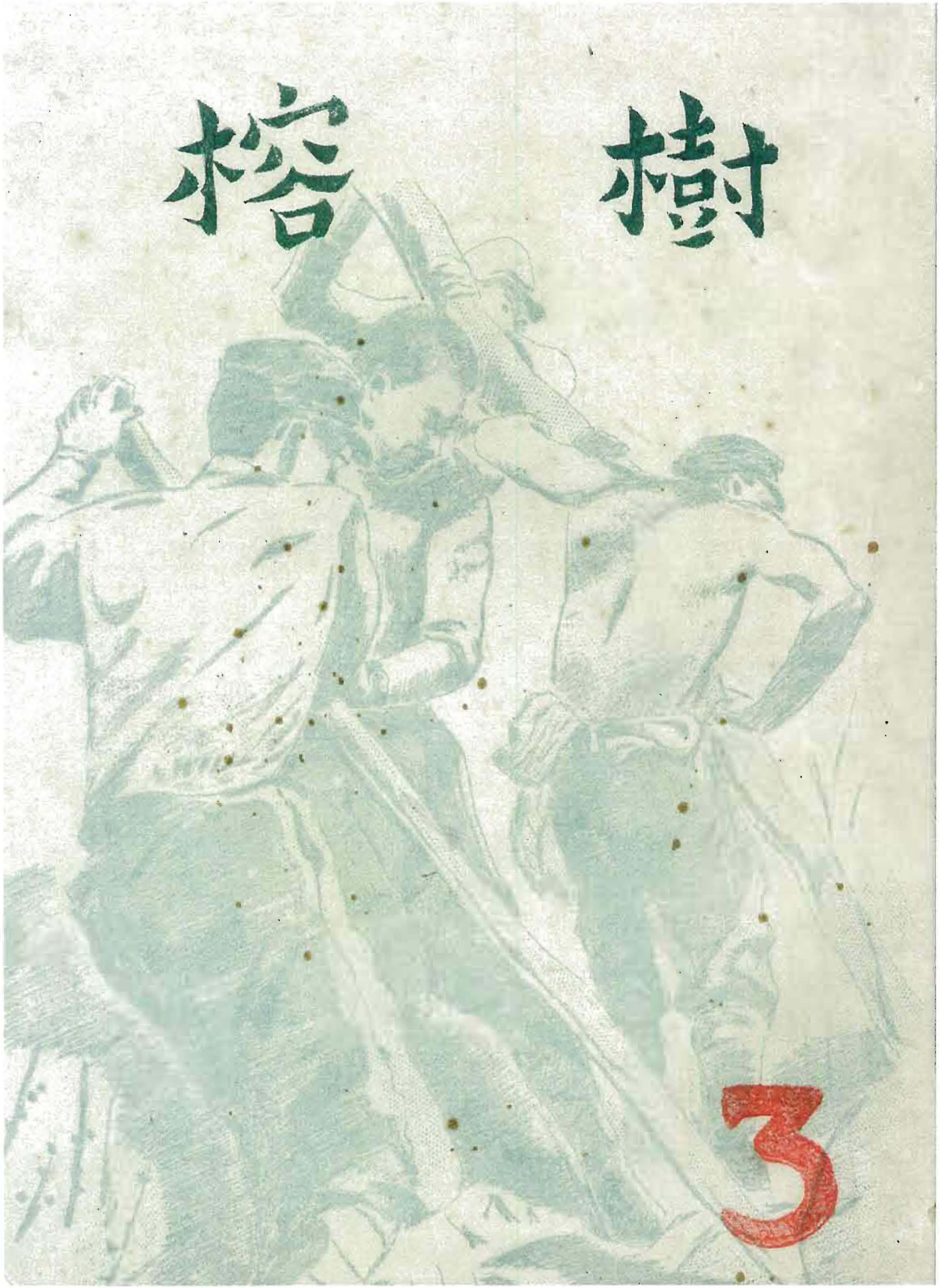
榕樹



3

目次

榕樹　第三号

冠頭之辞　岡田実　2
先人の跡を尋ねて　渡邊正紀　3
校方の窓より望みて　姉島進彦　6
随想断片　胡南　10
A君へ　田中慶一　12
よし当衛　岡田実　15
屁　鳴破生　18
研究能率について　荒田義明　22
現代女性　女性恐怖生　24
誰か夢なき　明石野人　26
學生と社會　近藤義康　14

詩

新しい研究・東谷育夫　38
海・野頭雑感　工藤昌男　68
冬の日・私は私だ　鬼丸貞幸　17
無　鬼丸貞幸　67
・人工心臓　近藤生　23
・地震　鬼丸貞幸　21

創作

カビの生えてるロマンス　明石野人　28
信念（しんねん）の愛情（あいじょう）　とりゐたつま　43
美しき女性　森一　57
或るひと時　星光　69
心の灯　近藤義康　75
四人の夢　林瑢二　78
・榕樹の頁　37
・編集後記　77

冠頭之辞

教室主任　宮田　実

椙樹會が生れて三年。第一回卒業生を出し、第二回卒業生も間もなく社會に出やうとしてゐる。

生活はインフレの渦の中に翻弄され、心はコンミユニズムとローマンチイシズムダダイズムの渦巻く中にある。

又一面に於て敗戦後の處理は容易に進捗せず、政府も積極的になれず、國民も明日の不安を停電の暗い住家で次々と味つてゐる。

然し我々は屈してはならぬ。光明は曲角まで来てゐる。食糧の心配もあり、住居や衣類の不足もある。然し國内情勢の中に私は確かに復興の芽生えを認め、再建の兆を喜んでゐるのである。

殊に熔接界は再建に必要な尖端的技術であり、一般日本人にも漸く斯る新興技術に對する認識が出来かけた。戦災地の復興から産業の再建に熔接の活用は期して俟つべきものがある。

椙樹會員が協力してこの任務の大半を荷ふ日も遠くないと思ひ、教官、職員を始め、卒業生、在学生の一層の奮闘を望む次第である。

十二月二十日

先人の跡を尋ねて

渡邊正紀

中學時代に、歴史の先生が、「歴史は暗記物ではない。歴史的事実を学びこれを通して自己批判を加へることにより現在の又自分自身の歩みを規定すべき何ものかを悟りとるべきである」といはれたことが、今でも尚頭のすみに残つてゐる。

現在における学生諸君をみると、我々が学生であつた時代と較べて遙かに現実に足をふみかまへ、全般的にしつかりとしてゐるといふ感じをうける。然し乍らこれを学問的にみれば、学生時代は自立性に乏しくとかく他力本願式になりやすいことは今も昔もあまり変りはないやうである。然し一度世の中に出てみると自分のぶつかつた問題は自分で解決する外はなく、さらにまた、どうしても自分自身独立する外はないといふことをはつきり認識するものである。言葉を換へると一人歩きをしなければならなくなる。

うなつてくると、学生時代に習つた個々の知識や、先人の残した業跡といつたものは、直ちに自分の現在当面してゐる問題にぴつたりあて嵌まるような解決を与へてくれるものでないことを更めて知り、之が解決におぢ〳〵乍らも一人歩きをしなければならなくなつてくるであらう。

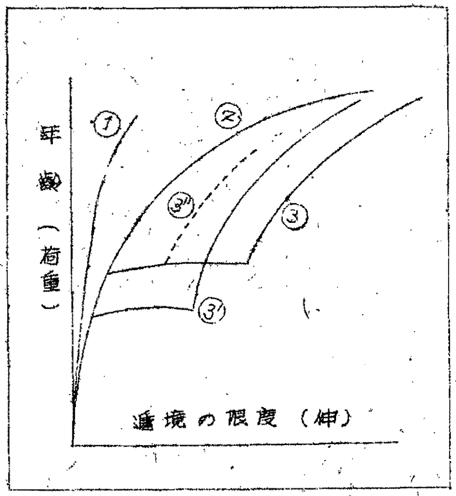
こんな場合に、自分自身の能力に危惧の念をもち、甚だしきに到つてはいたずらに学生時代の不勉強を悔ゆるのみで落胆してしまふ人すらあるのであるが、これは間違であつて、これに勇敢にぶつかつてゆく所に自分の能力を発揮せしむべき方途を知り得るものである。勿論我々はエンヂニヤーであつてみればその解決にしつかりした科学的特に工学的基盤をもたなければならない。そしてかゝる基盤は常に拡大、強化せられるよう絶へざる努力が払はるべきことは申すまでもない。我々はかゝる基盤があつて始めてエンヂニヤーとしての生命を保持し得るものである。

凡そ人間は時に及んで強気で自尊満々たる場合もあり得るが、又その反面非常に悲観的な淋しい気持におそはれるものであ

る。そして何かの方法によつて勇氣づけられたくなる。そんな場合種々の方法があるであらう。模擬も亦その一で、それによりレクリエイトもされるであらう。然し模擬はその場限りでまたそれ丈のもののような氣がする。

誰れでも小、中学時代に一度や二度は「わが崇拝する人物」といふ題で作文を書かされて困つた經驗があるであらう。これを更まつて考へるとすれば、とかく偶像化せられた人物を考へたくなるものであるが、どんな部門に入つてみても必ずあの人はと目し得る人のあるものである。凡そ自分の現在の環境と餘遠い人物に就て知るよりも、身近かな人物についてその成長過程を知り、從横に自己批判にかけてみる程我々を勇氣づけるものはない。勿論對象とする人物の數は出來る丈多數である程よい。例へば学問的分野についていふならば、多數の注目すべき業跡を發表してゐる人がある。私はこれはと思ふ人があるとすぐその人の過去に於て發表せられた論文は、たゞに学會におけるもののみならず、巷間に出されてゐる雜誌類に到る迄出來る丈多く蒐め、これを發表年次順に集録してみることにしてゐる。これはその人の研究業跡を知るのみならず、その人の思考動向を知ることが出來、その人の年齢と共に思想的煩惱の跡をわが身に引き較べて察知し得るとのである。

勿論限られた部門における人々であるが、私は出來る大多數の人々を自己批判にかけてみた所、そこにはある共通性をもつた特性曲線とも稱すべきものがひかれるような氣がしてゐる。人間を一定の型にはめて眺めることは、人生の面白味も何もなくして終ふ虞れがあり、又人間としての深みを沒却して終ふ譯であるが、こゝでは主として学問的な進境といふことを一義的に考へてみよう。



線圖の描き方としては種々考へ得るであらうが、縱軸に年齢（大学卒業後の年数）、横軸に進況の程度（量的に表すことは困難である）をとつてみると、大体圖のような金屬材料の引張線圖と相似の線圖が得られるようである。

どうも私の商賣柄こんな形の線圖が直に連想せられるのであつて、このような線圖が何か科学的根據を持つてゐるのかと反問せられたり、又もつと適切な表現法があるといはれるならば、私自身としてもあえてこの形を固執するものではないことを斷つておく。

先ず曲線①であるが、恐くどエンヂニアとしての科学的裏付の行はれなかつた種類の人々がかゝる場合に相當するであらう。これは鑄鉄を引張つたようなもので便宜上これを鑄鉄型の人物と名稱けておこう。②に示す曲線は相當努力した人で、進境の度は大いに認めらるべきも過去に飛躍的な業跡とい

ふか進境の著しい時代を持たざる型の人物を示してゐる。これは丁度銅やアルミ等を引張つた時の如く、著しい降伏現象のみられざる場合に當るであらう。曲線③はある時代に新しい境地を開拓し飛躍的な進境を示してゐる型の人で、その時代の業跡がその人の業跡上に於けるクライマックスになつてゐる場合が多い。これは軟鋼に於ける降伏現象に似ており、かゝる現象のみられる年齢についてみると、勿論その人の環境や能力によるであらうが、大体学窓を出て五年から十年位の間に見られるようである。偶々かかる境地に到達した人も、その人の多情さからそのことに專心つゝ込むことが出來ないで③'の如く、早く外れて終つてゐる場合もある。

私は專攻してゐる学問の關係上、常時材料の應力－歪線圖に親み、これが特性について種々考へてゐるのであるが、なんだかこれらの無機物質も生命をもつてゐるような氣がしてならない。そんなことから、應力－歪線圖の特性より人生のことを關連して考えてみると、種々面白いことが考へ得るようである。然し今まで既に妙な屁理屈をかきすぎた嫌があるので、これらの線圖についてはこれ以上紙面を冗することは止めておこう。要するに叙上の型式の何れが最も望ましいか又現在自分は何れの型式に屬しており、又如何なる點に現存してゐるか考慮してみることは、あながち無益ではあるまいと思はれる。

以前拙文を長々と書き連ねてきたのであるが、とかく我々としては先人の業跡が偉大なれば偉大なる程業跡そのものに幻惑せられるのみにて、その人の人間的内部にまで立ち入つて考へ得るゆとりは、なかなか得られないものであるが、勇氣を揮つて人間的な解剖を從横に揮つてみたいものである。これは自分丈で行ふものであつて何もその人の名譽を傷けるものでもなければ、又その人の真價を減少せしむるものでもないことはいふ迄もない。

又自己批判にかけるにしても、技術者といへども時にはマネイジヤーでなければならず、又技術者である前に文化人でなければならないのであつて、たゞに一要素についてのみならず、各種の要素を摘出して多角的に考へてみるべきはいふ迄もない。

即ち私の話の本筋は先人の跡を尋ねることにより、わが身を處してゆくべき指針を得ようといふにある。そして出來る丈自分自身に自信を持つて個性の完成を期したいといふにある。

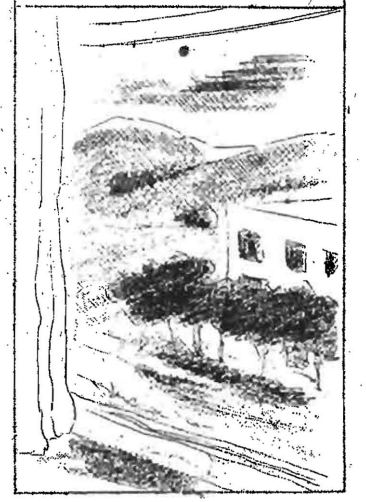
本号は卒業生の記念号との由、私自身の当時を回想すれば既に若九年に垂んとする。私は世の中に放り出されておそまきながら独立といふことを考へた。周圍の人々は必ずしも学生時代の恩師の如き存在では勿論あり得ない。然し乍ら私はそれらの人々から多くの事柄を学び得たように思ふ。それは現在並に將來の私に大きな影響を及し且與へるものと考へてゐる。新卒業生諸君の將來の発展を祈る次第である。

（昭和二十三年一月四日記）

枚方の窓より望みて

——愛の人間學——

彦遠島妹



まへがき

大學生活も未だ一年に滿たず、遠く人里離れた御殿山に孤獨な學生生活を送つてゐる私が大學の雰圍氣を感知し、大學の空氣を呼吸して日々大學生として育成しつゝあるとは私の今には絶對に言へない事である。しかしこの樣に送つてみたいと言ふ希望なり空想なり或はそれに對するプランを持つ事は出來るのである。又自己の思想を根據として一般論的な事項を上級生諸君に傳言する事も可能である。私はここに私の見た阪大工學部の一部が溶接教室に關して若干の意見を述べて見たい。しかし論は學生としての態度を中心點として現實の世相と、我々のいだく世界觀なり人生觀の空白部分に對するつの内うめを述べて見たいと思ふのである。

(1) 自己の尊敬

大學は最高學府と呼ばれてゐる。世間は大學に於ては眞理が探求せられ教授せられてゐると期待してゐる。「眞理の探求」それは大學の使命であるが、この使命は教授の側と學生の側の兩方面に於て充されれる。教授側に於ては研究が自由に行はれ自由に思索し自由なる環境によつて眞理と考へたものを學生に自由に教授すれば大體達せられる。更に學生側からは教授が學生に教授する目的は學生をして社會準業に對する學問上から批判する能力を養ふ事にある。學生が批判力を養ふ上には、大學に於て學問上の種々の見解を聞く機會を與へられる事を必要とする學生は、ここに於て始めて學問の訓練を受け、學問上の見識を立てる事が出來ると思ふ。勿論聞く機會が與へられても學生がそれに對する準備とか努力をつまねばならぬ事は申す迄もないが、種々の見解を聞かされることは、高專及びその他では得られない特色とも言ふべきものと思ふ。「人間は自己を尊敬し自己に忠實であらねばならない。」とは我々が常に心がへねばならぬ學訓であるが、尊敬と言ふ事が、カントの言ふ如くまことに人間的な感情である。人間のみが尊敬、從つてまた輕蔑の對象となる事が出來る。ここに於て大學生たる以上各個人の自由の立場に於て夫々の世界觀、社會觀を持つ事は必須條件にして、我々が大學生として他人より尊敬せられ愛される爲めには、單なる知識丈能のみならず、自己を尊敬する事に、一つの理解を持つ事であると思ふ。されば如何に理解するかゞ問題であるが、若し私達の自己尊敬の根據が學生に教授する學問上から批判する能力を養ふ事にある。學生が批判力を養ふ上には、大學に於て學問上の種々の見解を聞く機會を與へられる事を必要とする學生は、ここに於て始めて學問の訓練を受け、學問上の見識を立てる事が出來ると思ふ。勿論聞く機會が與へられても學生がそれに對する準備とか努力をつまねばならぬ事は申す迄もないが、種々の見解を聞かされることは、高專及びその他では得られない特色とも言ふべきものと思ふ。「人間は自己を尊敬し自己に忠實であらねばならない。」とは我々が常に心がへねばならぬ學訓であるが、尊敬と言ふ事が、カントの言ふ如くまことに人間的な感情である。人間のみが尊敬、從つてまた輕蔑の對象となる事が出來る。ここに於て大學生たる以上各個人の自由の立場に於て夫々の世界觀、社會觀を持つ事は必須條件にして、我々が大學生として他人より尊敬せられ愛される爲めには、單なる知識丈能のみならず、自己を尊敬する事に、一つの理解を持つ事であると思ふ。されば如何に理解するかゞ問題であるが、若し私達の自己尊敬の根據

が、高貴、權力、才能の如き種類のものであるならば、凡ての人に向つて自己を尊敬せよと要求し得ないであらう。然らばその根據は如何といふに人間は元來この創造的世界の創造的要素である。各人は個性者であるが、しかし同時に社會一般者の要素である。即ち我々は自由の主體であり、人格であるが、しかしそれは社會の背景なくしては、存立し得ない歷史的存在者である。世界の創造は個人を通じ個人の媒介なくしては行はれ得ないのである。そしてこの世界創造進展が辨證法的發展によつて歷史的に一つの運動體として認識される時に、我々は現代に價値あり意味ある創造の參與者として個人の生存の無價値でない事を知り得るのである。個人は決して物質的存在でなく又生物的存在でなく實に歷史的存在者であり、社會の一員としてそしてその時代に應じて夫々義務と責務を感ずる自由の主體である。私達は如何に卑劣であつても無力であつてもこの認識を出發點として客觀的眞理へ宇宙の解明に努力し、神聖なるものを心に宿す事が出來るのである。ここに何人と雖も自敬の根據を見出し得ると思ふのである。エピクテートスが曰ゞ「美しき馬が自己の美を善るはよい。馬の所有者が馬の美を誇るに至つては理由なき事である。」と、學識、才能の故に自己を崇拜するのは二重と癡を要にするけれども、常識の如きは周圍によつて愈〻展望を擴くする性質のもので自己の學識に滿足し、さてはだ大學といふものによつて自己を魅させんとする人は眞の愛知者とは言へぬであらう。世間的日常的な評價は眞の評價に遠いものであるし、それは大體に於て一般的、相對的な評價に過ぎない。我實か空虛かは、容易に決定されるものでない。我々は、大學生としてのプライドを持つ事は絶對に必要であるがそれは常に求めて止まぬ知的要求と誠遜を基とし誠實なる實存的なる我實せる生を營むことによつて自己を最高のものにする事が出來、そのプライドも生命ある存在となるのである。私達は自信を持たねばならない。しかし決して高慢になつてはならないのである。

(2) 世界の觀望

次に一足跳びして先ず現代の世の中を眺めて見たい。現在最も困難であり同時に最も許容な事は我々が世界うまれ

覺をそれもバランスのとれた感覺を獲得する事であらう。ある意味からすれば日本の運命を開く鍵がそこに隱されてゐるとも言へる。我々には戰爭が終つて世界の壓力といふものが今更の如く強々と解つたと同時に、食糧の不足、世界からの孤立、引揚民の歸國などの諸事實を背景として、遠く世界を見渡そうとすると眩もいつかがなく、この小さい島々もそこにうごめく同胞との上にのみ注がれてこれを世界といふ廣大な文脈の裡で摑むことが出來ない始末である。輸入食糧を爲立のち食と同じ氣持で受取り之からも還和しく生きていれば世界のお慈悲が集まるであらうとの方へ方も、國民の一部には生れてゐる。又貿易が再會される事も近々だ、國家だの民族だの言はずに世界列強の和解になら如樣に愚々日々の食傭けに働んでいれば天下泰平、こうした方へ方も日を追つて有力になりつゝある。之をもう少し漸敬に示すと、ダンス・汗言の洪諾、お化粧、雨が降つても色眼鏡等々、要するに都會の盛り場の風俗を中心とする國際色が一方にあれば、今迄、否現在もさうであるが農村の背景が貿易兩間と農村悉荒の可能性の樹陰のもとに昭和五六年の書未の暗い影を時びて呼吸してゐる。しか

し一方にはインド、ビルマ、インドネシヤの諸民族は新しい運命の日を迎えつゝある。それすらも日本人には遠い昔の物語りであるかの様に、別の世界の出来事の様に満み聞きそして忘れてゐるのである。

現在國民の大部分は超國家主義者になりつゝある。そして快樂、欲望、本能のまゝに動きつゝあるのである。そしてその人間改造は果して短時日には出来ないと思はれる。されば我々はどの様にあるべきか、我々は民族の一人であり、いかに貧しくともわが民族と共に生きようといふ決意はもとより自然且健康なものである。民族を建設するのがインテリの職掌でもないし、進歩的婦人の看板でもない。將来の日本に對して我々の力によつて立ち直り得るのである。われわれは民族への愛情をもつと正直に、且大膽に表現すべきである。しかして今尚かに我が國を省みるに、果して我々はこの國家の要望に應じ得るだけの努力を續けであるであらうか、現代の學生生活は苦しい半面が多い學問をするのにも皆の學生とはけた違ひに苦しいのである。アルバイトも負擔に充へる問題である。社會は學生を見捨てゝとしてゐるかの様に見える。學問なんかするのは馬鹿の様に思つてゐる人も多いのである。誠に我々は世間の無知を憤りたい程である。昔から學者を輕遇しないのが日本の特色である、わけて大阪はこの感が深い様に思はれる。勉強をなすに與へられた環境は實に悪いのである。しかし歎ずると否とに關せず、我々は日本民族として世界の中に立つてゐる。世界は、大阪は我々に與へられた環境である。環境を嘆いてことがなければ何事も成し得ない。我々は環境に自己を適應させねばならぬと同時に環境の中に自己を實現して行かねばならぬ。我々はこゝに鋭いバランスのとれた感覺を必要とするのである。

四　科學技術者たる爲の條件

さて本論に入つて行かう。今迄述べた如く現代は一面眞に學問には不向きの時代である。然しこの不幸は又將来國民が身を以て体驗するであろうが、我々として少しでも時代のギヤツプをなくする様にあらゆる方面に努力すべきである。そして國民に學問の價値を認識してもらつておく事に明るく生きて行きたいものである。それには先づ我々が實踐し學問への愛情を深くしなくてはならない。學生が學問に對する憧憬を燃さない様で何んとして世人を批評し得るぞ、私はたゞに私の考へる科學技術者なる爲の必要條件を列擧し諸兄の參考に供したいと思ふ。

日本の再建に科學技術の必要な事は論を待たないそれは優秀なる科學者、技術者を求める。この意に入る者は先づ有能な專門家となり優秀なる研究業績をあげることを心掛けねばならない。しからば優秀な研究とは何か、それはその研究、成果が人類の福祉の爲に役立ち得る可能性の大なるものである。とは言へ勿論それは直ちに實用化し得る如きもののみを指すのではない。科學体系を發展せしめる基礎的研究も同等以上に重要なことは自明である。何れにしても優秀なる研究を生きんが爲には常に自己の專門分野の進歩における自己の研究の役割、自己の專門分野の進むべき方向、その社會的意義に就いての反省を怠つてはならないのである。之が科學者たる爲の第一條件である。次に過去に於て科學者が關心であつたところの家族の幸福その研究成果を社會に役立たせる事それは技術者の任務である。將来技術者として働く我々は

科學者の研究成果を役けつぎ民衆の利益の爲に利用し決して一部の人の利益に利用されたり又は民衆の不幸に悪用されない様にしなければならない。それには科學者、技術者の團結を必要とし又組織結合を作りそれに參加することが必要である。之が第二條件である。

以上は以て我々技術者のつ掛け実踐すべき最小限度の義務であると信ずるのであるが、これが爲めに學生時代はその方向に進まんと自ら進んで專門學科の勉強はもとより社會科學、人格陶冶、強健なる身体等あらゆる方面に積極努力を積むべきである。そして日本科學界を民主的に改革する上に積極的活動をなしその改革運動に身を投ずることが望ましいと思ふのである。

五　結論

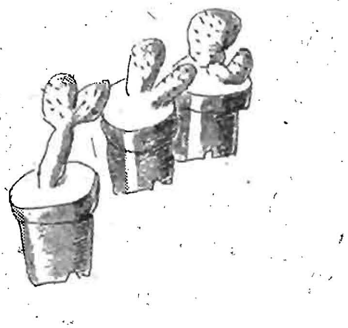
以上大体一般論を述べて来たが今我が身を省みて果して我々の日々の行動は今の様で滿足して良いであらうか、一國の文化水準の一度とも言ふべき大學生として我々は果して恥かしくない行動と言ひ出来よう。実際に於て今日の學生が大人になり過ぎては居ないであらうか。世間に對する眼も必要であるが、餘りに現実向きになり快樂主義になり易ちではいないだらうか。一面自立大學生が私立大學生に近くなりつゝある傾向はないであらうか。勇敢現在の熔接學生間に學問への愛が缺ち學生の使命が忘れられて他にエネルギーを使ひすぎてゐるのではないかと思はれる。ここに我々は歷史考えとは言へ熔接工學教室誕生をもう一度省みる必要があるのではなかろうか。そして本邦大學唯一の存在として阪大工學部の誇り得る教室として愈々光輝あらしめるべく、各人は一層の努力を必要とするのである。そして他教室より尊敬され羨まれる教室の空氣を作り上げたいのである。そして教室生徒一致團結して熔接の學問的体系を作り上げ熔接の歷史的發展の基礎を現代に建設し日本工業界の發展に一大貢献をなさねばならぬ。即ち工業界の革命的存在となりたいものである。又一方に於ては熔接と言へば岡田門下」といふシンボルを建立したい。そして岡田門下の學問愛の傳統を後世に傳へ工業界からの信頼と尊敬を獲得して熔接を通じ將来國家は勿論世界文化への一つの貢献を爲し得るならば教室の存在は誠に意義あるものである。斯くする爲めには実に各人の自覚と、それに依て生ずる學問への愛と努力とである。將来会を中心として教室生徒の團結を以てあたれば如何なる困難も打破出来るし、協力の結果は愈々聞けるのである。我々はここにもう一度自己を省み大學生本来の使命に目覚め、教室の旺盛なる空氣をみなぎらせたいものである。私は熔接の代名詞として「岡田門下なる言葉の聞える日の早からん事を切に望むものである。

六　結論

以上四項目に亘つて述べて来た事で私の言はんとする所が少しは諸兄に理解して戴けたと思ふのであるが、要するに、大學生は大學生らしくあれと叫んでいるのみである。そして障碍多い道を切り拓け、より高い理想の塔に近づきたいものである。個人は自由の主体である。そして行爲、思考、感情その他生きる事それ自体自由であるが自由の中に超えてはならない限度を認知して戴きたいのである。インテリゲンチヤの悩みは深い而し解決の道は必ず有る。諸兄よ、夢を追ひ街へそして最後に再び「常に自らを尊敬し自らに忠実であれ」と呼ばして戴く。

（一二・三）

隨想斷片



湖南（谷垣尚）

（一）

青春の情熱が若い五体の血管に躍る
おゝ荒れ狂ふ激浪と嵐の　吹き荒ぶ海岸に立つて
砂を噛み天に向つて　力の限り號泣したい

現在の如きデモクラシーの観念は改められなければならないが、、警察観念は改まつたとしても、現状は決してよくはならない。悪いといふことを知らないといふ理由で、悪を行つてゐる人が、今の世に果して何人あるだらうか。飢饉に際し、僅微を抱いて死んだ百姓の話や、闇をせずに死んだ大学教授や判事の話を聞いて日本人が嘲り笑はずに自ら深く省りみて、その高き風を慕ひ、心の糧に、この心を固めて行つたなら、必ず又日本人が真心を取り戻し、本然の美姿に還り得るであらうことを信ずる。

（二）

今や、道衰れ正義が失はれつゝある。人は合理主義の名に於て利に趨り、人間性の名に於て、その欲望を遂げ、自由の名に於て放縦横暴を恣にしてゐる。求むるところは私利である。考ふる處は獲得であり、一様純粋、大識見の下に、成敗利鈍を眼中に置かず、自が信念を貫いた曽ての巍々たる気骨は今や見る影もない。

巷に蔓るは権勢に媚び、義を捨て利に就く奴輩、彼らこそ曽て、最も日本精神を口に唱へた輩ではないか。そして彼らこそ祖國を今日の悲運に導き、而も恰も今日を予見したるが如き言を吐き、恬然として恥じぬ輩ではないか。吾々の周囲にも多く此の種の輩を見る。その言ふ所は他人の受売にすぎず、その行ふ所は、功利打算の上にのみ立つ。大学は正に、その本義を失ひつゝある。大学は為に権威を失ひつゝある。学生に於て、大学は衰滅の危機にありと断ぜざるを得ない。之を救ふの道は他になし、学生自らの覚悟のみ、余自ら深く省みる所以である。

（三）悟り

吾々は絶えず修養し努力し深く考へなくてはならぬ。悟りとは、この不断のたゆまぬ修行の課程に、忽然と開く境地である。悟入の一瞬前と後に於ては確然たる区別を生ずる。深き禅の彼岸と此岸である。雲の上と下の開きである。然しこの一瞬の開きを生ずるまでの不断の苦行修錬を経ずしては、到底達せられざる境地である。恰も長い路を歩いてきた旅人が、川に行きあたつて、此處かしこと、さがし求めて漸々浅河瀬を発見して渡り得る如く、悟人の一歩前まで苦行をつみまりし修行者が、猶も苦行を重ねあるとき、忽焉として雲の上に出るのである。

我らが日常道を求めて真剣なる修行を重ねあるとき、その行程に於て、時に小さき悟り——佛教の所謂知的解脱に属すると思ふ——を経験する。遥か遠い所にあるであらう修行の目的生活そのものであり、吾々自身の中にこそ、修養の実は存するなりと気がついたのも一つの悟りであつた。然し悟りは修養の一エポックでこそあれ完成ではない。絶對への大いなる前進ではあるが、修行はその後にこそ續く。先哲が残した平凡な言葉も悟り得て、始めて、霊感となりて沁々と身に感ずる。悟入して得る所のものは、先人が悟人の境地より遺した平凡なる真理にすぎない。吾々が智識としては今日に於ても過去に於ても、絶えず耳にし目に見る平凡なる真理である。

悟入は知ではない。知より行を経て体し、更に透徹して骨髄のレゾナンスを以て、之と一体化するものである。真理は平凡であるかも知れないが、之を得るための行は非凡でなくてはならぬ。悟入は単なる知識や経験や考察ではないのだ。

多く悟入は、直感によるといふ。然しく直感悟入であるか之に至る道程は、あらゆる理論、体験、行の連續不断の積である。この道程を説明することは出来る。然し悟入は、教へたり説明したり、出来るものではない。自らの苦行を俟つより他はない。而もこの行を不断に自ら求めて行ける人は、極めて稀い。過ぐる八月の日夜、異常なる衝撃と苦悩と必死の努力は、余をして不易の大道に於ける悟入への偉大なる前進をなさしめたるを感ずる。あの夜の明けんとする頃、思はず、我悟れり、と絶叫せざるを得なかつた悟入の大歓喜の境地こそ、うつせみの法悦境ともいふべきものであらう。

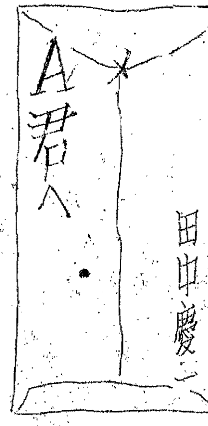
（四）追憶

あゝ、この空、この土、私の修錬にいそしんだ飛行場に夕闇迫る。

紫に霞みたる秩父、赤城の連山、次第にうすれゆかんとし、西の空一際赤陽に映えたるも、次第に赤紅色の雲、そこかしこと、青緑色に変じてゆく。

將に黒きとばりに包まれんとする飛行場に獨り立ちて、果しなき大空を仰ぎながら、思に耽り、我れも亦、その夕闇に没してゆくを知らざりき。

—完—



御手紙有難う。元気で通学せらるゝ由、安心しました。卒業も近づいて研究に忙しい事と思ひます。

扨て、社會生活の感想を知らせて呉れと君は言ふが、僕はまだ〱先輩ぶつて話す丈けの資格は無ささうなので、僕の一日の生活を記すに止めさせて貰ふ。

毎朝目を覚すと大抵時計は六時を打つてゐる。それっと急いで跳起る。毎日々々六時に起れるだらうかとよく心配したものだつたが、どうしても此の時間に遅れる事は出来ないのだと言ふ事を常に考へてゐると、自然目が覚めるものだ。真白に霜置いた朝の道を駅迄来ると、フオームは通勤者で溢れてゐる。襟巻に首を縮めた復員時の外套が膝をふるはせている。工場近くに来ると、夜勤者がぞつと〱寒相に駅に向つて小走に走つて来る。一刻も早く暖い家庭に帰らうとする、それ等の労働者達の顔色は青白い。さう言へば、工員達は、工場の汚れた空気を呼吸しながら太陽の光を受ける事は少ないのだ。

出勤票を箱に投入れて夫々の職場に散つてゆく、そしてぼろ〱に破れ真黒に油じみた仕事着に着替えるのだ。間もなくけたゝましい調子高いサイレンが唸り出ると同時に、コンプレッサーモーターが勢よく廻轉し始めて一日の仕事が始る。

僕は現場事務所内に机を與へられて専ら技術全般の仕事をするのが任務だ。仕事は自から見付け自からそれを解決づけて技術面の向上を圖るのだ。然しその仕事は飽迄も現場と遊離した研究室的研究であつてはいけない。現在の工場は決して研究室で完成された理想的な学問を受入れ得る態勢を有するに至つていないと言ふ事を無視してはならないのだ。だから我々が大学に於て得た智識をその儘に生かさうとして出来ない所に大きな苦しみを見出す。学生時代に得た智識が現場では少しも通用しないではないか。然しそれだからと言つてその智識が全く無價値だと言ふのでは勿論ない。それを受入れやうとしない今の現場に歯痒さを感ずるのだ。大学を了へて工場に出る様になつた当初、常に考へてゐた事と言へば、得たる智識を実際生かして何か満足し得る仕事を行はんといふ漸しい野心だけだつた。工場と言ふものゝ現状を全く知らぬでもなく、又労働問題、工場経営の問題に全く無関心だつたわけではないけれども技術面に対する期待と希望を大きく持ち續けてゐたのだ。然るに工場に入るや先ず工員に接し彼等の日々の生活を見又聞かされる。労働組合の会合に出席する。労働問題に関する講義を受ける。そして次第に此の問題に對して関心を寄せる様になる。工員の気質、監督職員の気風、即ち人間と人間との接觸を少しづゝ〱体験によつて知つて行く様になる。私達が毎日〱愉快に送つて来た　あの学生生活が何と限られた小さな一面であつたらう。何んの心配もなく、何んと呑氣になく過したあの社会は、有んと特殊な世界だつたらう。学生時代に於ても、労働者の気質を考へてみぬでもなかつたし、動員中に於ても工員と接する機会も幾度か有つた。然し今現実に接する、新しい

風の吹く社会の中の彼等は、何と自分等と異つた人間に見える事だらう。課長級の人々を始め、役付の人達が工員の扱ひにのみ終始頭を悩まし、躍起としてゐる様子を何とか解決出来ぬものなのだらうかと毎日眺めてゐる。現場の課長と言へば全て技術者であるのに、実際技術面にタツチしてゐる、いや少くともそれを考へてゐる人が、どれ丈けあるだらう。只管、人事問題に労働問題に、或ひは作業工程にのみ忙殺されてゐるではないか。そして私達技術員と言ふ肩書を有つ者さへも、單に技術関係の仕事にのみ專念從事する事は不可能ではないか。然し又之が若し可能であつたとしても果してそれだけに專念して居りさへすれば、それでよいだらうか。各職場の技術員が集まれば、常に論じ合ふ問題の一つが之だ。

組立工・工作機械工等と違つて熔接工は自己の仕事を完全に学問の一つとして取上げてゐる。つまり熔接が單なる經驗などで解決されない事。即ち科学の力で始めて解決されるものである事を熔接工自身が特によく考へてゐる。だから現場に行つても相当専門的な質問を彼等の口から受ける。だからと言ふ譯ではないが僕は一日も怠りなく着々と努力して、勉強する事の必要を感じてゐる。今迄は質問する立場に在つたのに、今は質問される側なのだ。どうか君もその積りで精々智識を肥やして置いて呉れ、専門的な質問を受けるのは決して上役からではなくて工員達からだ。然しそれでゐて私が何か簡単な講義でもすると大抵半分は解らないと言ふ。答案でも書かせれば、何更ひどい。講義の拙い事も勿論だが、学校生活の短かつた彼等は受講にはあまりにも慣れてゐない。筆をもつ事の全くない彼等は自己の意志を表示するすべを知らない。之は口頭で説明させても尚更だ。之に對しては決して軽蔑など感じられない。最高学府迄終る事の出来た自分の境遇に今更感謝すると共何千人かに一人しか角帽を被り得ないのだと話された教授の言葉を想ひ出して責任を感じる。

仕事開始後暫くは工場は何處もフルに回轉して活気に満ちてゐる。然し二三時間を經れば次第に若気は衰へて来る。職場の轟音は次第に静まつて来る。之は自分等が今迄にも經験して来たのと同じ事だ。だから晝食時や退社時間が近くになると仕事は殆んど止つてゐる。動いてゐるのは雑役工の職場ばかりだ。仕事終了のサイレンが響く頃には工場の門をくぐつてゐる者も多数ある。門の両側には守衛が五六人工員達の持物に目を光らせてゐる。

彼等工員等の動作の中には我々の理解し難い事も沢山ある。我々は何時迄も此の人達と全く隔つた今迄の社会に止つてゐてはならない。然し彼等の中にずつかり融け込んで了つたが為に、自己の批判し反省する事を忘れて了つてはならない。之は技術の面に於ても仝様で一つの社会に閉じ籠もると、最初は目に付いた缺點が見えなくなり、現在の態度に慣れて了つて、改善すべき余地に気付かぬ様になるさうだ。私はよく或る上役の一人から工場内の改良すべき點について意見を求められる。それは、その人が、私の如き真新しい人間によつて慣れ切つた工場の空気を破つて、自分の眼をそこに向けくが為ださうだ。僕は入社当時、特に仕事の拙さが目立つてゐた。或る部門が最近どの製品を見ても、余り悪く思へない様になつた。果して製品精度が向上したのか、それとも自分の目か、先輩達の言ふ如く慣れて了つて、現在の状態を最良と

學生ト社會

近藤義康

○近頃の学生が眞に社会を知らんとして、あらゆる面に向つて努力を拂ひつゝある事は喜ばしい。昔の象牙の塔に立籠つてゐては、偏屈な性格を形成するのみである。

○"学生だから悪い。一般の人なれば良からう。"と言ふ觀方は"学生"と言ふ特別の枠に嵌込んだ所謂封建的な思想としか考へられない。之では何時迄経つても民主化は出来ない。

○逆に"学生だから許される""一般の人は許されない"等と言ふ觀方も"学生"と言ふ特權的な考へをもつ、小輩の愚かさである。之が"將来""お偉方"なる馬鹿思想を露出す。

○私は某職員から聞いた。「下から上つて来た人は良く知つてゐるのでこせこせして困る。学校上りは大胆でよい。然し前者よりは知らない。」と
吾々学生にとつては、よく味はねばならぬ所が多い。よく知つて居乍ら大胆なるは結構であるが、知らずして大胆なるは実に危険千萬だ。之等の人が所謂「お偉方」になられると思ふと険呑極りなし、須く「細密にして大膽なれ」

感ずる様になつて了つたのかと、少々心配してゐる。

何だか、つまらぬ事をくどくどと書いて了つた。君の注文とは些か懸け離れて了つたかも知れない。大切な事をまだまだ言ひ忘れた様な気がする。思ひ付いたら又書く。

どうか君も、元気でやつてくれ。僕も張切る。そして自分の常識を常に前進させる事を忘れぬ様にする積りだ。

それから、学生時代は何んと言つても一番楽しいよ。学生生活の短い最後を、完全に充分味つて置き給へ。

では又

A君へ

よし兵衛

岡田實

空襲が熾烈を極めた昭和二十年七月の始めである。山あいを縫つて走つて居た汽車が全く暗闇に包まれたので時刻は九時近くであらう。姫路線では乗降者が比較的多い一つの驛美作落合に着いた。

私「今日は此處で泊ることにしよう」

當「宿がありませうか」

私「まあ当つて見よう」

翌日バスで村瀬村の方へ行く予定であつたからバスの始點が駅前だから成るべく駅前で宿を探がした。

燈火管制がこの山中でも厳重を極めてゐたので家の形すら分らない位暗かつた。駅の正面に旅館にしてはお粗末な飲食店兼業の宿に入つた。

當「今晩泊めて呉れませんか」

おかみ「……」

五十位の黒い顔の中にキラキラした眼を光らせた私達の様子をじつと眺めた。

當「明日バスで発つので一晩泊めて呉れませんか」

おかみ「旅館の方は一パイですら、うちの裏なら泊りなさい」と

主人の様なのがちらつと姿を見せた。態度もかくやと思はれる様な薄気味の悪いどうもうるさそうなおやぢである。

夫「よしとけ」

おかみ「まゝえゝがな」

おかみは私達を見て

おかみ「まあ何にも出来まへんで唯泊るだけならお泊り」

それからおかみが女中を呼んで私達を炊事場を通り抜けて奥の二階に案内した。

燈火管制の爲に……もう今では昔の夢の様に思はれる……どの部屋もどの部屋も防空電球に更に黒いカバーを被せてあるので薄暗い。

勝手の判らない私達は女中について行動することが容易でなかつた。然しまあ今夜はこゝで空襲から解放されて泊れると思うと、一寸息付いた気持もした。まさかこの田舎に敵機が襲うとは思はれなかつたからである。

薄暗い燈りの下に机があつた。女中は堂々たる身体であるがどことなく品がない下町風の姐御と言ふ感じである。然も女中らしくないプライドを持つたところもなくとなくそら恐ろしい気がした。此處へ入つてからおかみと言ひ、主人と

言ひ、女中といひ、講談等に出る山賊、夜盗の類の様である。
この暗い御屋で屋天井でも降りて来やうものならどうにもならない。こんな処で生命を捨てるなら、潔しく敵弾をうけた方がましかもしれない等、先刻のほっとした気持もどこへやら物騒しい。
第「もう何にもありませんのですが……お汁位わかしませうか」
私「それは有難い。じやそれで御当を食べさして貰う」
私は宿料六圓と書いてあるのを見て拾圓札一枚をテツプにやつた。
島「何んでも出来るものがあればつけて呉れ」
第「下で聞いてみませう」
女中が下に降りかけた時小島が私にこつそり尋ねた。
島「先生いくらやりました」
私「一枚たよ、少いかな」
島「少いですわ」
小島は彼女の後を追つて又一枚與へた。そして飲物を頼んだやうである。
女中が暫くして上つて来た。愛嬌が湧るよろしい。さては追加の勘定があつたと思つたが、事実はそうでなかつた。
第「今日はどうにもなりませんの、あんたたちがあんまり遅いから此の次はもつと早くいらつしやい。牛肉でも鮪でも御合しますよ」
島「どうにもならんか」
第「今夜は宇治して下さい」
女中は机の上に汁と香物とを置いた。
私「君なんて言ふ」
第「よしべえです」
島「今夜来たときはそう言へばいいんだね」
第「えゝ、よしべえ、て呼んで下さい。此の次は吃度御合しますわ」
よし兵衛は降りて行つた。
島「先生、もう一枚やれば出しますぜ」
私「そうかもしれないね」
よし兵衛が真暗な中で行燈を数き蚊帳をつつて呉れた。二人はさして不安も覚えず寝てしまつた。
翌朝、朝飯のときもよし兵衛がゐた。
私「四五日のうちに又来るから頼むぜ、二人どは少し数が過えるかもしれんが」
よしべえ「承知しました」
私達はバスで出発した。

×　×　×

それから数日後、先発隊は昨日出発、本隊は今朝、後仕末を引受けた殿部隊は、十二時頃本営野を出る汽車に乗つた。
私は丁度駅で全員の三木といふ職員に逢つた。彼は私の家が空襲で焼ける迄、私の家に居たのである。
三木「先生あれ以来始めてですね、今日は書飯だけ附合つて下さい。落合へ行かれるなら、次の汽車に必ず間に合せますよ」
私は自分の家の焼跡のことは、名と知らなかつた。三木は

焼跡の近くに居て私の畑の管理にも当つて呉れてゐたので、私は一汽車遅らして三木の泊つてゐる宿で書飯を共にした。
学生達は落合へ着いたのは七時頃であつた。

×　×　×

学生A「先生こまりましたで」
私「どうしたんだ」
学生B「どうしたつて、先生がよし兵衛と呼べばいゝと言ふので、よし兵衛おらんかと言うたら、よし兵衛は居るが、それはうちの子で國民学校へ行つてると言ふんです。
然し先生が、確かによし兵衛と言つたから、そう言つたら、家の子をよい兵衛、くと呼捨てするなんて失敬だなんぞ恨みでもあるのかつて、えらい、おこられてしまいました。
いや女中さんだと言つたら、そんな女はいないと言ふのです」
よし兵衛は遂に私達のところへ来なかつた。主人と何にかあつたのか他の女中の話では、一寸帰つてゐると言ふことであつた。
空襲激烈を極めた七月中旬どこへ行つても不足なことばかりであつたが、よし兵衛から度取るべきアンサーが一方的に失効したことも淋しかつた。

——完——

冬の日（病床の一日）

鬼丸貞幸

真白いシーツの中に
眼をとぢた、両手合せて
つめたくなつてゐる私
そのとき、私は、
あの白い雲にいだかれて
とんでゐるだらう

私は　私だ

室生犀星作
僕は気がつくと
ひるま街を歩いてゐるのであつた
をよみて
ひとりよがり

さうだ
誰が　何といつたつて
私は私なんだ
私以上でもなければ私以下でもない
この広い宇宙に私は一人しかいない
天上天下唯我獨尊
誰が　なんといつたつて
私は　私なんだ

屁

喝破生

「ほんとにお前は屁の様な……」屁は全く頼りない存在である。そもそも屁といふ称呼は厳格に定義するならば体内で発生したガスが、人体を離れた瞬間に於て始めて効力を発生するものであり、僅か数秒にしてその生命は消失する。かげろうよりも命短きものである。屁には音を発しない場合も往々あるが、多少ともの臭気を伴はないことは殆どない。

独逸語では *Blähung* 又は *Wind* となっており、英語では *Break wind* 又は *Break air* となってゐる。体内で一気圧よりも僅かに大きい圧力で蓄積され、放出流速は毎秒一、五米に達し得る以上、空気を破るといふ現し方は理窟に合っており、現象の把握としても正しい。

普通に言って老幼男女、貴賤富貴の別なく発生する屁であってみれば、此の放出は何等恥ぢるべきでないが、近頃の娘さんの様に「アラ生理的現象よ」と済ましておられることも一寸困りものである。殊に満員電車に於ける一発には恐れ入る。電車内では他人に迷惑を及ぼすものとして明かに禁止事項中に含まれるべきであらう。

然らばこれが放出に対して如何なる注意を必要とするか。吾等幼時より、もろもろの行儀作法に就て両親の注意を受けて来たが、残念ながら屁の放出要領に対しては余り教へられなかった様である。一々便所へ走って用を済ますことは最も無難であらうが、甚だ非能率的な方法である。完全にこれを実行せんとすれば、二十四時間の過半を便所通ひに費さねばならぬ様な御仁も相当あり得る。

屁の功罪は周囲の状況と其の人とによって定まる。屁を放って彼我共に無関心でおられるのは其の人の特殊な人徳とも言ふべきか。一発の屁はよく人を笑はせて悲みを霧散せしめ、或は談判を円満に進捗せしめる潤滑油の役を果すかと思へば、人を

憤慨せしめること予想外に著しく、為に成立せんとせる話も一瞬にして崩壊し去る結果となる。或は結婚式場に於て緊張の余り思はず落した花嫁の一発は、遂に彼女を自殺に導いた実例の如く、尊き人命迄も左右する。同じ一発でもこれが盲腸手術後に発生したものならば、彼氏を始めとして多くの人々を此の上なく安心さし喜ばした事であらう。げに屁に心なく唯周囲の条件を異にするのみ。但し此の花嫁の自殺は本人の気の小さかった事に原因するが、周囲の人々にもユーモアとウイットがあれば、即興の一言により悲劇は喜劇として終ったかも知れない。

前記の如く屁の放出の及ぼす所は重大であるから、これに関しては熟慮を必要とすると共に屁の洗礼を受けた側の人々に於ても簡単に喜怒哀楽の情に左右されることなく慎重に考慮すべきである。

更に本文の冒頭に於て述べた如く、屁には音の聞こえない場合はあっても臭気を伴はない場合は殆どない。臭気で有名なのは「鼬の最後屁」である。人間の屁は敵よりの防禦武器でないから鼬のそれの如き臭を発する必要は毛頭ない。屁は食物が腸内で醗酵或は腐敗して生じたガスで、正確な分析結果は持合してゐないが、成分は飽和並に不飽和の高級炭化水素とインドール・スカトール（大便臭）類似の窒素化合物と考へられる。

肉食の鼬の屁は草食の兎の屁よりも遥に臭く、闇成金の屁は学校の先生の屁よりも臭い理由は、窒素化合物の関係から推察出来る。但し草食でも回数の点は別問題であって又玉葱の如きは質に於ても侮り難い。

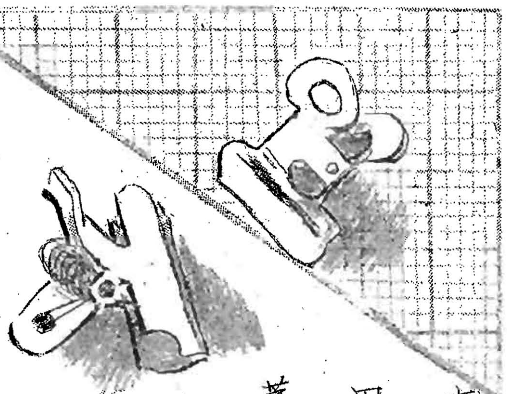
屁其の物は、余り悪臭を有してゐないが、大便層を通過する間に、此の悪臭を伴ふと弁解的な説を固持する人がある。其の真偽の程は実験の結果に俟たねば明かでないが、何れにせよ、これ等の悪臭をも含めた総括的なものを屁と称する方が正しいのではなからうか。要は屁の定義を如何に定めるかに懸る。

吾等が学生時代の寮生活或は合宿生活に於て、屁と哲学は常に研究の中心題目であり、一友人は個々これに点火して燃焼するを知り、メタンの如きガスの存在を実証する有力な論拠としたものである。又当時の西洋映画にも今日の官能映画に近いものがあり、凄いのになると大写で数十秒間連続のウムアンムングウントキツセンの濃厚なものがあった。見物の紳士、淑女は寂として声なく、固唾を飲んだ沈黙が続くのが普通である。若しそれ此の場合、真暗な一隅から遠慮勝ちな不用意の一発が放たれんか、哄笑は哄笑を呼び、名画は一瞬にして台無しとなる。これを楽しみに度々同じ映画を数回見物に行く学生（犯人）もあった位である。

犯人といふ言葉が出たが、俗に言ひ出し兵衛（屁）といふ言葉があり、犯罪捜索に敏腕刑事が思惑を暴ることの多い人間心理の微妙な一面である。但し前記映画の犯人は決して筆者自身でない事を断って置く。

吾等の学生生活と屁とが密接な関係にあった事から話が横道に外れ出したから本筋に戻さう。握り屁といふ奴がある。屁を手で握ることはガス体の捕集方法としては極めて不完全であり、ガスの大部分は逃出してゐる。而も一発のガス量は大体三〇

研究能率について



荒田吉明

「能率の増進」といふことは、あらゆる行動に對して適用されるべきものであり、又基礎をなすものである。而して日進月歩にある科学を研究するものにとつては、特に重要なる問題である。

然らば、研究能率の高低、大小とは何であるか、これを先ず明きらかにしなくてはならぬ。即ち研究能率の大であるといふことは、明きらかに短い時間の研究によつて、重要なる問題を速かに解決をつけてしまふことであります。而して、この重要なる問題といふのは、この問題の解決が、諸方面に重要なる關係をもつてゐることである。即ち、一方面だけでなく、種々の方面に重大なる關係を及ぼすが如き研究は重要であると言へます。然らば、一方面にのみ重要で他の方面には左程影響なく、重要なものでない研究は重要ではないかといふに、明かにそうではなく大切なものであります。が、能率の點から申しますと當然前者には劣つてゐます。故になるべく多方面に影響を及ぼすが如き問題を、成るべく短時間に解決することが、能率を上げる所以であります。かく考へると眞に能率を上げ得る人は非凡の人でなければ出來ぬ業でありますが、しかし、凡人では絶對に出來ぬ事かといふに、そうではなく唯それが割合に難かしいことである。

さて、愈々研究の能率についての實際的討論に入つて行きます。即ち一問題を研究するのにそれが直接どういふ意味を持つておらうが、その研究がどれだけ長くかゝらうが、そんな事はどうでもよい。又研究の結果がいかにつまらなく見えようとも一向差支へない。現在如何につまらなく見えても、將來何か價値が出てくればよいのであるといふ研究よりも、研

究そのものに重きをおく考へ方は、能率の點から申しても、明らかに不滿であり、その態度にあき足らないものがある。極く昔の学者にはこういふ種類の人々が内外を問はずよくあつた。昔はともかく、現在の如き学術の日進月歩で競争の盛んな時代に於ては、研究方法は能率第一主義によらなくてはならぬ。一つの研究が後世になつて、大事件になるかも知れぬいふが如き、謂はば僥倖を待つ様な問題は、一つの研究をしてゐれば、例へその問題が解決出來なくても、それに到る道中に於て〝棚からぼたもち的〟な、新発見(発明が得られるかも知れんと、(実際にはかかる現像が多いが)思ひてやる研究は、甚だ面白くない。然して結局は能率問題になつているのであるが、かゝる研究方法は成功する公算が至つて少ないといふことだ。即ち結局能率は下廻ることになる。そして常に他人に先んじられることになる。

故に一問題を解決するに當つては、周到なる準備と確然たる自信(勿論この自信たるや觀念的主觀的のものであつてはならず、即ちこの研究は理論的では、こうであるから、こういふ方法で研究にとりかゝれば必らず成功するであらうといふ自信である)を以つて、研究にとりかゝることが必要である。

英國の物理学者〝ラザーフオード〟が(予想を伴はざる研究は成功せず)といつてゐるが誠に至言であります。ひるがへつて〝我々のやること、なすことは、自ら蛇におちず〟といふ言葉がありますが全くこのことばで言ひ盡されてゐます。そして得てして、無茶苦茶な研究をやり勝でありますす。日本人といふと話しが大きくなりますので、吾々といふ言葉でごまかしますが、事實吾々は多分にこの如き危険性をもつてゐるのではないでせうか、この點、独逸人は優秀であると聞いてゐますが、これと日本人との比較については辯護もしたいのは山々ですが、我田引水、唯我獨尊的になるのを恐れこゝにて筆をおきます。兎に角一つの研究するに當つて周到なる準備と先程申した自信とが必要であり、準備と確信とは研究能率を上げるのに必要なる條件である。

(以上)

人生地獄(於乗降時)

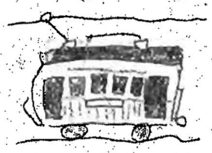
一、「押スナ押スナ」ト言ヒ乍ラ自ラ押シ乗ル方モ居ル

二、「飛乗リヲシテハナラヌ」ト言ヒ乍ラ発車ヲ待ツテヰル車掌サン

三、「降リルナラ早ク降リヨ」ト言ヒ乍ラソレニ續ク先着居士

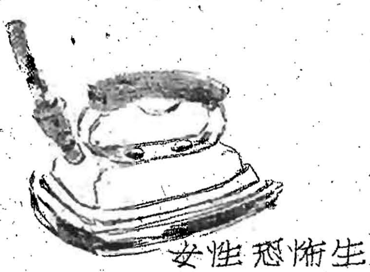
轉バヌ先ノ杖

一、「オ後へ御下リ下サイ」ト言ハレテモ下ラヌ男、人ガ車体トフオームノ間ニ挾マレタルヲ見テ後ニ下レリ



二、「俺ノ家ニ泥棒ハトテモ入リ得ナイ」ト無用心生ズツカリ盗ラレテ後戸締嚴重君トナル。(近藤生)

現代女性



女性恐怖生

現代の女性と言つてみても、女性の一部よりしか見た事の無い人間故、大きな事は言へないが、散見する女性よりその女性の外観的解剖をして見よう。或は此の一文は女性より攻撃される點もあらうがまあ我慢してもらふより仕方があるまい。題して現代女性と。

一、女性と身長

近頃の男性も、身長は伸びて来た。杉の様な木ばかりで巾の無いのが目立つ。現代の女性達にしてもやはり身長の増加した事は驚くべきである。思春期に達したる女性はその母より身長があると言はれてゐる。それ等女性の母達の青年期より文化の進歩があつたのであるがその文化の進歩の女性の肉体に與へた影響は数多いがその一つに身長の増減に悪影響を與へないと医学的に證明されてゐるが、生活様式の変化即ち椅子に坐つてゐる方法や学校生活の屈伸運動が大いに寄與してゐるのではないかと考へる。感覚的より言へば胸にきつちり帯を締めた和服姿よりも肉体の線をはつきり現し長い靴下をはいた洋装の方が高く見えると言ふ事も見逃し得ない事ではある。要するに身長が伸びその上視覚的にこれを助長してゐる事は事実であらう。

二、脂肪―脂肪と言ふと青春期の女性はすぐ眉を寄せる。だが厳然たる事実は青春期の女性は、この避難もなくのそのだん／＼太くなつて行く。浮世の七不思議と言はれるのも無理はない。女性と脂肪それは切つても切れぬ関係にあると言つてよいのである。脂肪そのものは体力を出すと言ふ場合には不利である。真の女性らしき女性は此の意味で肉体労働と言ふ面で男女同権を叫ぶとも、男性に劣ると言ふ事は、如何とも為し難い。されど脂肪を恨む勿れ、かゝる反面に於て、病気や怪我の場合にはおそるべき耐久力を発揮するのである。かゝるが故に登山の耐久力に於て女性は男に優る事が多いのである。女性に脂肪の多いと言ふ事は、即ち、女性としての最大任務とも言ふべき妊娠分娩授乳と言ふ一大労働に対する準備なのである。この生理的持久戦の準備が、青春期の女性をいやが上にも美しくするのである。おさつ、しる二等の嗜好や驚くべき食欲それのみが女性の脂肪と関係あるのではない。肥つてきてはじめて、女らしくなる事になるのである。かゝるが故に、若き男性よ、異性の愛を得んと欲すれば彼女の面前で〃肥つてゐますね〃と言つてはならない。現代の女性は、肥る事、即ち脂肪のある事を大いに嫌ふのであるから……そして肥つてゐると言ふ言葉が彼女を侮辱する言葉と、信じてゐるからね。

故に女性、特に若い女性と〃ヤセ薬〃〃ヤセル方法〃とは

絶對的なる関係が存在する様である。マツサージ、美容、体操はまだいゝ方である。現代の女性のあこがれは、栄養不良的美人である。

吾々は将来の為健康な女性らしい女性、即ち栄養可なる美人を愛人に選びたいものである。

三、顔さまゞゞ。先づ頭の髪より筆を進めよう。現代の女性は猫も杓子もパーマネント時代である。老人の言ふ黒髪の美と言ふものは、一部の女性を除いて殆んど見受けられなかつた。一時の様に峯の様なパーマネントは見られぬが、遂に内巻と称するしとやかな型も見受けられぬ。現代の流行はアツプと称するおばけの様なもの、おきんじゆうの様な大きい玉を頭へのせた様なもの、種々様々である。トーチカを前頭部にのせてゐるのは殆んど總てゞある。と言つて私はパーマネントを悪いと言ふのではない。古の油でかためた結髪より衛生的であり、活動的である。この面に於て大いに奨励するものゝ、結髪が顔の一部となつた今日、各人各自の御面相に應じたパーマネントをかけてもらひたいものである。

眉。現代の女性の多くは自然的な感じを表す眉は少くなつた様な気がする。細長く墨でかいた眉、まるで百足虫があるいた様な、おそろしい感じである。眉は現代女性の顔の玄関であり、何も見ない中に眉だけがクローズアツプされる。恐ろしい術を女性は発見したものだ。

眼。明眸禍とか、明眸罪あり等と言はれる様に、眼は人の心の活殺権を持つてゐる様である。美しい眼は、見てゐても実に気持のよいものである。そして深く澄んだ眼はその人の精神状態を表はしてゐる様な気がする。然し現代の女性は眼の美しさを得んが為か眉を抜いたり、アイシヤド等を塗したりするのを見受けるが、これは男子の口出しすべき範囲を出てゐるかも知れない。そして現今、伊達眼鏡がはやり紫外線よけと称して夜でもかけてゐるのを見ると、情ないものである。女性の為にかゝる悪習は止めてもらひたいものである。

鼻―昔の美人は浮世絵にも見られる様に、鼻筋の通つたのが多い。現代型の美人はどちらかと言へば団子鼻の傾向がある。だから現代の女性は昔の様にことさら鼻筋を通つた様に、見せる化粧をしないし、逆に低く鼻を押しつける様に人前でもパフをたゝいてゐる。昔の鼻も今の鼻も呼吸を司る大切なものには違ひないが、鼻の化粧も時代の推移と共に、ハナハナ変つたと言はれるであらう。

唇。昔の写真等に見られる日本人の唇はなるべく小さくしようとしたらしい。唇の厚い大きいのを野蛮人の様だと言つた時代は過ぎ去つた様である。紅く燃える様に塗つた唇は、現代女性の生命であり、生命の武器でもある。若い女性のこの印象的な唇こそ受身の女性の、男性への挑戦的武器であると言つて過言だらうか。

肩。なで肩の美人が世に迎へられたのは一昔前である。現代の女性は裃の様な服を着て大道を歩きまはつてゐる。之も女性の感情の表現の一方法なのであらうか。何故ならば愛情を表現する場合よく女性の肩をつかみ勝であるから……。

その外、手、足、脚、腰と見るべき點が多いであらうが、つまらない観察はこの位で止めた方が無難であらう。この位で敵に背をむけて、三十六計ときめる事にする。

（以上）

誰か夢なき

23組 135・140
1.000.000

明石野人

●世は正にインフレ時代。人間は先ず生きねばならぬ。生きる為にはゲルがいる。これは古今東西変りなき真理である。
人として生きるのは比較的容易である。しかし人間として生活するのは困難である。
そこで野人は考へたのである。我々人間には夢がなければ生きて行けないと。
夢！夢！夢！こんなに書くと夢が夢でなくなる。野人はぼうとして幻の中に彼女ならぬ夢を見続けるのである。

●能率が叫ばれる。戦後の生活は無駄な空きはりである。交通難、不圓滑な配給、停電、凡そ能率には縁遠い。文化生活も夢である。而し、我々の生活に文化を添へるもの。——それは合理性を裏づけた能率生活への切替であらう。環境を整理して手近な所から能率化して行かうではないか……。

● 山猫、山犬争議が新聞を飾る。「フテイ」の輩が山猫と変つたか？ 食ふ為には人民は猫にでも犬にでもなる。それの方が人間様でゐるより上等だらう。人間でゐるのは政府のオエラ方と新聞階級だけか、猫や犬がでない様に政府よやつてくれと野人は夢をみる。

●或る新聞にいふ〃戦争でトラや狼がゐなくなつたら議場にトラや狼がゐる〃と。人民の選んだ選良がトラや狼とは人民は上べの猫撫声にだまされたのだらうか・そんな代議士様は追放して動物園につないだら、猫撫声で文ないて、さぞかし〃ヨイコ〃が喜ぶだらう。これからは我々は裏まで見通す神通力で選良を選らぼう。

●話の泉！古い知識の竹の子である。小さい頭に平凡社の百科辞典でも入つてゐるのぢやないかと野人は考へる。しかし割つてみたら脳みそしかないだらう。我々凡人は殊に野人の様な人間はいらない事はよくおぼへてゐる。そのくせいる事は知らない。一つ〃馬鹿者の泉〃でも作ればどうだらう。これには選ばれる自信(？)を野人も持つてゐるのだが……。

●大人はヤミの話はかりだと〃ヨイコ〃が言つてゐる。現在の世の中食ふ為にはヤミである。ヤミは生活の凡てであるのか？ ブルのヤミ話は景気がよい。プロのヤミ話はしめつぽい。同じヤミでも光の見えるヤミが欲しいものだ。ヤミのない晝が野人には待遠しい。

●インフレと言つても色々ござんすとある日インフレ君が言つてゐた。物があつての物価高と物がなくての物価高。どちらがよいのか？ ブルは金がふところへ陰降といふ。プロは金がふところから陰降と言ふ。野人には、この世がとかく不可解である。

●作家の求道精神の中にはモラリティも必要だが、精神の高貴性への不断の探求が続けれはならぬ。日本の現在は……。エロ・グロのはんらんでは駄目である。一般人のレベルも引上げるべきだらう。しかし作家たるもの血みどろな斗争で現実を克服するだけの勇気が欲しい。野人は精神の高貴性に近づくべく努力するのが現在の文学の目的と考へる。しかしそれも相對條件の問題だ。かかる相對條件の成立する日の夢を野人はみるのである。

●酒・煙草……etc. 凡てが値上された。(公)は横に小さくなつてゐる。ヤミの本家の専賣局がヤミの本家の民間専賣局を取締るといふ。その図はさぞかし見物であらう。隠退蔵物資に今頃本腰を入れてきた。しかしそんな事より政府は大衆を犠牲にするのが好きである。人間の頭は安きに流れる。オエラ方の頭もこれでは素人達の頭と変りない。大衆は人民はもつと自覚むべきだ。

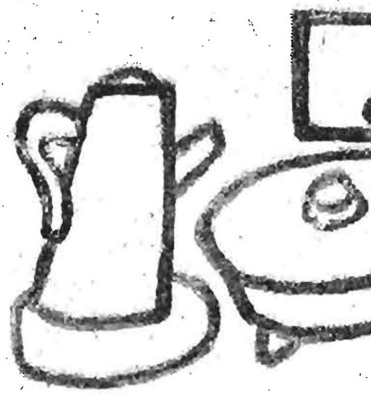
●停電さわぎ!! 日本人は凡て催眠術に落入つてゐる。エンセンの足らぬの睡眠で神へといふのか、人工の雨を降らすといふ。出来る出来ないでさわいでゐる。しかし野人には難かしい理論は解らぬ。しかしそれに必要な科学的設備が我が国で直ちに得られる様に努力しなければならぬ。凡ては根本だ。とかく日本人は末梢の事でさわぐ。もつと経験的になるべきだ。野人の夢もここにある。

●電車の中でオッサンが立上つた。戸はすでに閉つてゐる。〃降りますから一寸すみませんが〃〃オッサン何處で降りるのや〃〃ここで降りますね〃しかし電車は動き出した。オッサンは〃しまつた〃とベソをかいてゐる。これ位落着いていたら長生するだらう。人間は落着が肝心だとは、げにも古人は言へるものかな。

●地震／＼とさわいでゐる。地震はくるだらう。学問上の理論からも正しいらしい。しかし地震／＼でそうくよくよしたら生きて行けない。資材がないのに耐震補強なんて夢である。待つあるをたのむ心をもつべきか。凡て人は刹那的だ。もつと大きな心を持つべきだ。

●百萬圓当ればどうするか？ 貴方は？ 貴女は？ あるメッチエンは言ふ。〃私は目を廻す〃と。ある男は言ふ〃街路の眞中で焼いてやる。それだけインフレが減るだらう〃と。電蓄・眞珠の指輪・首飾……etc。これだけ買つても三十萬残るとラッキーハウスに書いてある。全くラッキーの名に背かぬ。野人が当ればどうするか？ 阪急の屋上からビラの様にまいたら如何。さぞかし拾はうとして生地獄ができて交通巡査が弱るだらう。慈悲深い(？)野人はそんな事はしない。しからば、どうするか(？)野人には当らないから安心だ。そんな夢をみる程年寄ではない。野人は若いからね。

●世は正にクジ時代。バクチを禁止する政府のやる事は大きい。臨時何とか法に基く証券発行とかいふ素人には解らない名をつけて公然のバクチを人民におしつける。インフレとデカタンに狂ふ敗戦国にうつてつけの街の人気者。甘くやるせない〃誰か夢なき〃のメロデーが流れる。貧乏人も金持と当らぬと知りながら〃それでもクジは行く〃。誰か夢なき。



〝カビ〟の生えてゐるロマンス

明石野人

君達は僕に初恋のロマンスを話せと言ふのかい。一風呂あびて晩酌をひっかけて好い気持になった今だ。これから花咲く君達に僕のロマンスなんて〝カビ〟が生えてゐるかも知れないが、僕は君達が好奇心以外の何かを求める気持で聞いてくれて、将来の生き方の何かの足しとなれば幸ひだと思って今迄ブラウにも話さなかったのを話すとしようか。

まあ火鉢の傍によって、一杯飲みたまへ。僕は若い人と話すのが好きだ。かういふと、僕はいかにも老年の様に聞へるがまだ不惑を二へてゐないんだよ。今日は教授・学生といふ身分を忘れてお互に一個の男として、僕は君達に話したいのだよ。さあ遠慮せずにやりたまへ。

(一)

君達の間では僕が恋愛結婚をしたといふ専らの評判だそうだが、はっきり言ふけれど違ふのだよ。今のブラウとは見合結婚なんだよ。僕の学生時代は日華事変・戦争・

学徒動員・敗戦といふ激しい時代を経てきて、全く今から志へると何とも言へない時代だったね。日本もこのままでは駄目だと何回思ったか知れない位だよ。自由といふ事がはき違へられて、猫も杓子も、何でもかでも解らないのに民主主義・民主主義なんて言った時代だったよ。それで学生間にも男女交際が盛んに行はれた。僕なんかも好い調子になって盛んに交際して、ダンスにハイキングによく行ったものだよ。お互の個性を伸ばし、交際によってお互に進歩し、条合的な人格を作るといふ理想にもえて、自村なんかを読んでは〝Love is best〟なんて言ってよく討論したものだ。

それで僕は結婚は断然恋愛結婚と決めたわけだ。それにともなふ話が今から君達に言ふ話なんだよ。当時は未だ頭の古い人間が多くて、今は封建的といふ言葉だけが残ってゐるだけで、現実には存在しないが、当時は表面のみ何のかんのと言ったが裏ではまだまだで僕はそのために恋愛結婚の理想を失ったわけだ。その時は悲しかった。封建的なんていふ言葉が日本にある限り日本の民主化は絶対に駄目だと思って男泣きに泣いた。

そして親のお膳立で今のブラウと結婚したが、半年許り婚約時代を送って、其の間大いに交際して恋愛結婚の真似事をやらねば気持が治まらなかったよ。しかし結婚してみると同じだ。僕は今結婚に関する限り満足してゐるよ。

これは余談になるが、僕に妹が二人あって二人とも、まあ上はH女専、下はY女専とか何とか女専を出たのだが、この二人には恋愛結婚させたいと思ひ、妹達の希望通り結婚させて今よろしくやってゐるが、〝結婚は恋愛の墓場なり〟とはある人の言葉だが、僕は何れの結婚にしろ、要するに、結婚は本人の自覚次第だと思ふね。

前置が長くなったがもう少し言はしてもらふよ。K君・S君そんなに堅くならずに一服すって菓子でもつまみ給へ、H君、君は今ロマンスの進行形だと言ふ事だが、おいおい、そんなに赤くならなくてもよいよ。僕の話を他山の石にして立派に進みたまへよ。

(二)

人間なんて、おかしなものだ。過去を振返る男は女性的な男だ。過去をかみしめてそれを反芻して生きてゐる男なんて、凡そ青春の覇気を失った男だ。

僕は常に何か新しい物を求め、いや新しい物をもって生きて行きたいと言ってたね。しかし僕は此頃つくづく考へるのだよ。過去も現実への一歩一段の過程である以上、過去を振返ってありし自分を眺めるのもあながち無駄ではないと思ふのだよ。それを未来のいや明日のファイトの糧とすればね。

(三)

あれは昭和二十一年、丁度僕が大学へ入った年の秋だった。四国の田舎から出てきた僕は、一面焼けてゐてもH市といふ所は珍しかった。終戦後半年位で今迄抑へられてゐたものが一度に堰を切って流れる様に人々は、唯官能を追ひ、ダンスホールにティルーム・にジャズは流れた。田舎者の僕には何と刺戟の強かった事か、僕は現実に押し流されて堆将々として日々を送っていたといったら、その当時の僕の生活が想像で

きるだらう。元来無定見で何でも賑かなのが好きな僕は、唯その日の刺戟を求めて街をさ迷つたのだつた。しかし学生の分際。やる事にも限りがある。

僕はその頃より殺風景な下宿で一人で考へる事が多くなつた。今迄忘れてゐた父母や、家族の顔が懐しく眼に浮ぶ。そして矢も盾もたまらない郷愁におそはれるのだつた。そんな時程、人間なんて何と弱い存在だらう常に何か大きな力に抱かれてゐなければ、何かを愛し又何かに愛されてゐなければ生きて行けないのかと、自分で自分が情なくなつたのだ。愛・といへば家から離れてゐる当時の僕には、異性の愛といふ事しか頭に浮んで来なかつた。

眠られぬ夜が続き、夢であらぬ方の幻を追ふのだつた。父母、妹、幼な友達、高工時代の下宿のメツチエン・はた又よく配給所で會ふ美しい何處かの奥さん。こ何やら自分でも解らない霧が走馬燈の様に、夢の中をかけめぐるのだつた。

その頃だつた。当時授業は下市であつたが、あまり遠いので、今迄専ら重役出勤をしてゐた僕は、何のエポツクか、一時間も早い電車に乗つたのだ。今の君達には一寸想像もつかんだらうが、当時のラツシユはすごくてね、K驛を過ぎる頃より段々押されて到々窓際へ押しやられて、停車のはずみに隣の人の足を踏んでしまつたのだ。"あいた"といふアルトの声に驚いてその方を見た僕は、はつとした。何故あの時はつとしたか、僕自身解らない。相手は有名なA女専の特徴ある校章を附けた女学生だつたのだ。元来心臓の弱い上に、何の徒か——後から考へると運命の悪戯といふ他ないが——はつとして少々のぼせた僕は、一瞬真赤になつて、わざ〱帽子をとつて——序に言つておくが髪を分けてゐると角帽はなか〱かぶりにくいので、知人に會つても僕は当時庇に手をやるだけで帽子は取らなかつたものである。——やゝ吃りながら"失禮""すみません"を何回となく繰返した。——後から彼女は当時の僕の仕草を想ひ出してよく真似をして僕を赤面させたものだよ。——そして僕はそれから何か安心した様に彼女の方を見つめ續けたのだ。

彼女は初め岩波でも讀んでゐて時々僕の方をおかしな人といふ様な目付で見てゐたが、やがて本をしめてしまつて窓外を眺めつゝも時た僕の方をちら〱と見るのだ。——これも後から思つたのだが確かに、僕に好意を持つてゐたからだと言へると思ふよ。いやのみすでなく全くの話が、ふとの最近くで正氣にかへつた僕は、今の自分の姿を想像して胸は早鐘の様になり下ばかり向いてゐた。授業中も彼女の事で頭が一ぱいで先生が何を言つてるのか解らず——ノートのみ埋めるだけだつた。

下宿へ帰つてからも僕はそわ〱してゐた。元来二元的な氣持の多分にあつた僕は、真面目に彼女と交際しようといふ心よりも、彼女を僕の現在の心のアラツクに埋めて享樂的な刺戟にしようといふ氣持が段々僕の心を左右してしまふのをどうする事もできなかつた。そして明日もあの電車のあの車輛に乗らう。そして何とか彼女に話しかけたいものだ。何と話しかけたら一番自然だらう、机にほゝ杖ついて考へるのだつた。こんな事は他からみていゝのかやないね。君達にはこんな事はないだらうが……

(四)

翌朝僕は実に早く下宿を出た。顔にしまりのない笑をたたへ"丘を越えて"を口ずさみつゝ。

例の電車の"ゴウ"といふ音が耳に入るのが何と待遠しかつた事か。……

僕ははずむ心と何かはにかむ様な氣持とに、錯綜した面持で乗車した。そしてすぐ彼女を探そうといふ内心に攻められながらも、あたりをきよろ〱見廻すには、僕は餘りに心臓が弱かつた。いやそれ程すれてゐなかつたといふのが本当だらう。それでも僕は何か暗示をうけた者の様に無意識の中に狭い車中を見廻してゐた。"居た"彼女は昨日の様に窓にもたれてこちらを見つめてゐたのである。あの美しい切長の目が何かを僕に囁いてゐるではないか、あの可愛いゝ口唇が、何かを僕に語つてゐると思はれたのだ。女の目位、男をみて凡てを語るものはない。僕はこの時、凡てを悟つた。そして今迄持つてゐた享樂的な氣持なんか一度に忘れてしまつて、全く純に彼女を愛そうとする氣持が湧いてきたのだ。この氣持は君達にも解つてもらへると思ふ。僕はどうして彼女の所へ近付いていつたか、全く無意識の中だつた。

"昨日は失礼しました"

"いゝえ"

ああ彼女の声!!僕には愛の女神の言葉であつた。

"毎日早いのですね"

"ええ、Nの方もTへ移つて大変ですのね"

"僕なんか毎日重役出勤で楽ですよ"

"まあ"

"しかしこれからは真面目に早く行きますよ。そう〱重役出勤ならノートがたまらんですよ。"

"まあ、そんな事"

「君に會ふ為にも」と僕は心の中でつぶやいた。それからO驛まで僕達は何も話さなかつた。しかし僕は十分満足だつた。若い情熱が体内に満ちみちて、佛の御手に抱かれた様な大きな喜びで胸がときめくのだつた。

"さようなら"又明日といふ意を言外に含めて。

五

それからの毎日。それは僕には初めて知つたこの世のユートピアであつた。毎日が若さに満ち青春を奏でるメロディであつた。周りの見るもの聞くもの、それらが僕の青春を謳歌する以外の何物でもなかつた。僕の頭は彼女の事で、渦巻き彼女の名を口ずさむのみで僕の身体はふるえ、熱情はほとばしるのだつた。

それからの僕はこんな半面があつたのだらうかと、僕自身不思議に思ふ程はしやぎ廻り、級友・殊に親友のI君、I君達知つてるだらう、K大のI教授だよ——なんかは冗談でも狂つたのかと真面目に心配してくれた程だつたよ。ああそうそう、君達に彼女の名を言ふのを忘れてゐたね、彼女は前島光子といつてA女専の音樂科の二年だつたのだ。

ついでに彼女の事について少し話そう。

彼女の御里はN縣のY市で近郷きつての旧家の末娘で、父親は多くの名譽職を兼ねて武士かたぎが抜けず、母親は所謂小笠原流で——にはめられた昔風のただ忍従をのみ強ひられ

たんだつた。そうだ、父親の末弟といふ人がかゝる封建性にあき足らぬ進歩的な思想をもつた人で、その叔父に幼い時から可愛がられた光子はその感化を受け、その上母親の日常を見るにつけても、かゝる悪風を破らねばならぬといふ進歩的な思想を持ち、その上音楽の才能はすばらしく県下の音楽コンクールに入選をして、女は女静淑で沢山だといふ父親の反對も、叔父の口添で当時Rに赴任してきてゐた叔父を頼つてA女学へ入つたのだそうだ。

僕もその当時組織されてゐた社会科学研究会へ入つて社会主義の一端をかじつて、凡ての世事を自己のレンズを通じて進歩的に眺めてゐた時だつたから、光子とそんな議論をしてゐると、全く時間の忘れる位だつたよ。光子も未だ幼稚であつた僕等に文学・藝術・音楽などは全く優れてゐて、僕も相当教へられる所があつて、一寸は勉強したものだよ。今でも時々授業中脱線してやる話しね。あれは光子に負ふ所が大きいよ。

お互に清い交りを結んでから、一ヶ月位たつた時だつたらう。N会館で終戦後始めてのバレーが公演された事があつた。元来僕はそんなものには興味をもつてゐたので光子に誘はれるまゝに見に入つた。ウエーバーの舞踏への誘ひの音楽につれて蝶の様に舞ふ舞台に、音楽の好きな彼女は全く我を忘れてしまつてゐた。僕も又その甘いメロデーによつてしまつたのだ。

それがハネテからも二人は全く悦然として何も考へる事はなくなつてゐた。テイルームで一時間ばかりその感想を語り合つた。その帰り路、例の如く、僕は光子の家まで見送つた。

折悪く雨が降りだして僕達は僕の羽織着てゐたレインコートを寄り添つて頭からかぶつて、まだ興奮のさめやらぬ面持でただ黙々と淡い街燈の光る路を歩くだ。雨が激しいので余計に寄り添ふ結果になり、光子の頭髪のよい香が僕の精神をうつのだつた。音楽へのさめやらぬ興奮とその香。僕は何かやるせない名状し難い気持におそはれて情熱が理性のからを打破らんとするのをどうする事も出来なかつた。

家のすぐ傍の四つ辻迄やつて来た。僕は全く無意識に

〃光子さんさようなら。〃

と言ひながら右手を差出した。一瞬光子も無意識に右手を差出したがはつとしてその手を引き

〃私恥かしいわ、さようなら〃

と言ひながら走り去つた。

僕は一瞬唖然としたがすぐ馬鹿な事をした、彼女の清い身体にふれようとするなんて、お前は未だ二元的な気持が残つてゐるのではないか。と自分がいかに信用がおけないのだらうとなさけなくなつた。しかし、あの時なぜ光子は手を引いたのか……。

光子は映画をみても劇をみても、何か批判をするのが常だつた。それが実にうがつてゐて僕は光子が自己といふものをどんなに堅く確立してゐるかといふ事に何時も驚いたものだ。そんな度毎に、僕は口に二そ出さなかつたが、光子を愛する気持は益々深くなるばかりだつた。

光子は二の交際を叔父母に話してゐたものか、一度遊びに来いと誘はれて光子の家へ行つた。叔父母共にいゝ人で僕を歓待してくれ全く安心してしまつたのだつた。その晩光子の

部屋で色んな話をした。恋愛論に結婚論。二人の目は凡てを輝いた。僕はあれ程信じてゐた理性を失ひそうになつた。暫しの沈黙が流れた。

光子も同じ気持だつたのだらう。堪へられない様な面持でつと立上り、僕が視線を光子に向けた時はすでに彼女の指は、ピアノの鍵にふれてゐた。〃マリヤマリ〃のやるせないメロデー。僕のそれを聞いた時の気持を想像してくれたまへ、僕は凡ての理性を失つた。

〃ミーチャン〃

僕は彼女の肩を抱きかかへた、と同時に彼女は倒れる様に僕の胸に身を投げかけてきた。僕の胸は早鐘を打ち彼女の肩は小刻みにふるえてゐた。

接吻!!全く無我無中だつた。情熱はパッと燃へて、若さは花と燃え咲いたのだ。

そして二人は手を取り合つて、次に潤んだお互の目をじつと見つめ続けた。愛は言葉でない、心にある。肉体にある。情熱は愛なのだ。

(六)

ある日曜。僕は光子を訪ねた。聞き馴れない声に一寸ためらひつゝ門より庭先へ廻つた。

僕は――行きなれてからの僕は直接庭先へ廻るのが常だつた。――そこに見なれない白髪の老人と話す光子の叔母に案内をそふた。その時、老人の僕を見る目が光り、叔母の当惑した顔が、僕にはその時一寸変に思はれただけであつた。

光子の父だつたのである。光子は母親似なので解らなかつたのだ。光子はでてきたが、いつもの様に部屋に通さず、何かそはそはして、〃あれは父ですの〃と言つたのみで〃それなら改めて御挨拶しませうか〃といふ僕の問に答へず、いつもと違つて何となく、僕には不快だつたので、早々に辞し去つた。未だ経験の浅い僕には光子の気持が解らなかつたのである。

尤も僕が先刻君達に言つた光子の家庭の封建的な事は、僕はずつと後で知つた事だから無理もなかつたのだが、とにかく僕には何かで頭をがんとやられた様にこたへたのだ。僕は何か光子に詰問したい様な気持で、明日を待つた。その時の気持君達にも解つてもらへるだらう。

しかしあの電車に乗つてゐない。僕はいらだつ気持で無意識に次の駅で降りて次の電車を待つた。しかし居ない。次の電車にもその次にも。そして翌日もそのあくる日も。僕は苦しみもだえた。光子はどう考へてゐるのだらうか。

僕は彼女を疑つたのだらうか。終には彼女は始から僕をもて遊ぶつもりだつたのではないかと疑ひだしたのだ。もうそうなつては矢も盾もたまらなかつた。手紙を書かうとして、何度も書き損じた。そして遂に意を決して彼女を訪ねた。しかし彼女は居なかつた。叔母より彼女はあの翌日、父と共に帰郷したといふ事のみを告げられたのだ。僕は誤解でも何かあつたのですかと尋ねたが、叔母は悲しげに首を振つて何も答へてくれなかつた。誤解位恐ろしいものはない。誤解は凡てを盲信する。理性も教養も愛といふものにからまる誤解には、何の働きも示さない。人は動物的に

なつて、がむしやらな想像をもて遊び、そして自らつくつた想像におびえてますます深淵にはまり込む。人間もこうなれば終りだ。君達も飽くまで冷静に考へてこんな僕の様な前者の轍をふまない様にね。

(七)

それからの僕は何か晴れやらぬ気持を抱いて毎日機械的な生活を續けた。そして中途諦め的な気持をもつ様に自分をしむけつゝ、折から始まつた試験の準備にただロボツトの如く机に向つてゐた。

忘れもしない試験も後二日といふ日だつた。帰校した僕は

"お客さんですよ"

と言ふ下宿の小母さんの声にものうく立上り玄関へでた。

そこに僕は何を見たか？光子の叔母だつた。しかもやゝ蒼白になつて立つてゐたのだ。

「何か？」

と僕は胸騒ぎを覚えつゝ尋ねた。

「光子が悪いのです。ぜひ来て下さい。一度お話しをしたいといふ光子の言傳です。」

「え！病気!!」

僕はどうやつて靴をはいたか分らない。道々光子の叔母は光子の家の封建的な事。父がいくら私達が言つても若い時代と時代の荒れを理解しようとしない事。そして光子には親同志決めた婚約者がある事を、あの日始めて光子に話した事。そしてこんな所に光子をおく事は教育上悪いと私達の反對も聞かずにいやがる光子を連れて帰つた事。御里での光子は半病人の様になつて悩み、食事も碌々とらず、見兼ねた叔父が帰御してやつと連れ戻つてきたが、無理がたたつて急性肺炎になつた事などを、やゝしどろもどろに話し、光子が貴方にすまないといひ續けて、ぜひ會つてお詫びしたいと言つてゐる事などを附加へた。

これを聞いた僕は、あゝ、悪い事をした。光子の気持も汲んでやらずに、お前は何んといふ馬鹿だつたのだ。光子はどんなに悩んだ事だらう。僕の何倍も何十倍も悩み續けたのだ。あゝすまなかつた。

僕は部屋に入るなり、力ない目でこちらを見上げ微かに笑ふ光子をみた。あゝ何とやせた事だらう。僕は何も言へなかつた。

「ミーチヤン」

僕は光子のやせた手を握つて泣いた。たゞ泣いた。何も言はずに…叔父母も泣かれた。心では元に戻つたのだ。容態は案ずる程でもなかつた。僕は過去は何も言はなかつた。ただ、

「元気を出してね」

といふ言葉をくりかえすだけであつた。

しかし運命の神は何といふ悪戯者か!! それから二、三日續いた季節はずれの寒気は衰弱し切つた彼女には余りにも負荷だつたのである。

死!! 彼女の死!! 僕は唯茫然となつた。やゝ口を半開きにした彼女。僕は何時までも彼女が機嫌よく眠てゐるのだとしか思はれなかつた。この時の僕の受けた精神的なショックは口では言ひきれない。

光子の死。葬式!! 僕はいつまでも焼香の前に佇んでたなびく煙の中に、光子の面影を茫然と幻に画くのだつた。

葬式の翌日、光子の叔母は僕に一冊の日記を差出し、光子の遺言でこの日記を貴方に形見として差上げてくれと言はれたと言つて、赤い縁取りをしたノートを僕に差出した。僕は今も涙なしで讀みえない。赤い縁取りもいつしか色あせてしまつた。しかし僕の唯一の青春の思ひ出は、このノートのある限り永久に續くだらう。君達にその中の二、三を讀んで僕のはかなかりしロマンスを何時までも偲びたいと思ふ。

まあ、そう緊張せずに一ぱい飲みたまへ。

僕も疲れた。一ぱいのんでから讀むとしよう。

(八)

○月○日　晴

妙な方にお會ひした。おかしな動機からだ。

私はどうしてこんな事を書き初めたのだらう。何か書き附けねば、じつとしておれない様な気がする。しかし私の手は動かない。あの方にあやまられた時、私はどうしてただらう。あの方は私をじつと見つめておられた。

どう思つてゐられたのだらう。

私はなぜかあの方の顔が忘れられない。今までこんな事はなかつたのに……

そのわけは……私はそれを知つてゐる。しかし私はそれを口に出すのが、恐ろしい様な気がする。

私は何を書いてゐるのか、自分にも分らない。

明日は……私の胸は何故かふるえる。

○月○日　晴

今日は朝からそわそわしてゐた。おかしな私だ。

あの方は来てこられた。

話しかけられたら、どうしたらいいだらうかと何となく不安だつた。

あの方は昨日の失礼をわびられた。私はそんな事は何とも思つてゐないのに……むしろ私の胸は喜びにふるえてゐるのに……。

何も話さなかつたが、私はあの方の傍にゐただけで、十分幸福だつた。

これが恋といふものだらうか……恋とは、こんなものだらうか。私には分らない。私の身体はふるえる。

あの方は、いつまでもいつまでも私の心に刻み込む程の印象を與へられた。

私はあの方の心が知りたい。

○月○日　曇後雨

N會館でバレーを見た。私の趣味にどこまでもマツチして下さるあの方は、本当にいい方だ。あの方と好きなものを見るなんて、私はこの幸福が、本当だらうかと、疑ひたくなる。

青い鳥よ、私のもとにいつまでもいつまでも おつて頂戴ね……

雨……ぶつて歩いた。あの方と一緒に……。

私は[illegible]手を引いたのだらう。私にも分らない。私の心と反對する私の他の心。……好きな人なのに……私は!!

私といふ人間は……あゝ

○月○○日　曇

あの方が来て下さつた。

色々とお話した。

あの方は何と頼もしい方なのだらう。私には勿体ない位だ。

接吻!! 始めての接吻!! 私は何も分らなかつた。

私の凡てはあの方のものなのだ。

　情熱……青春……若さ……

私は唯じつと涙で潤んだ目で、あの方をみつめるのみであつた。

今夜は眠られない。胸が波打つ。何時までも〳〵。

あの方の幻を追つてゐよう。眠くなるまで……。

○月○○日×晴

父！ 何と無理解な父。父には若い時代が無かつたのだらうか？ 私は品物ではない。情熱がある。私は若いのだ。あの方以外には愛する人はない。日本といふ國。美しい祖國。あの方のいない日本、そして生活……。そんなものは私には考へられない。私は悪くなるのだ。日本の女が何時までも型にはめられてどうなるのだらう。あの方も言はれた。

〃封建といふ言葉のある限り、日本は救へない」とそうだ。私は父には飽くまで反對せねばならない。お父様親不孝な光子をお許し下さい。光子は若いのです。

○月××日

私はとうあの方に半月以上もお會ひしない。あんなもてなし方をしたのだもの、あの方は何と思つていられるだらう。

あの方に何とあやまればいゝだらう。

それを思ふと手紙を出す勇氣もない。

父は相変らず分つてくれない。

私にはもう反撥する元氣がないのだらうか？

一層の事死んであの方におわびしたい様な氣がする。

いや〳〵私には生命の光りが必要だ。あの方が……。

（他）

僕はかうして光子を失つた。

光子を僕からうばつた封建性

僕は光子の爲にも社会の爲にも、微力を盡して戰つてきた。

光子が草葉の陰で、喜ぶ顔を思ひ浮べつつ……。だからその意味に於ても、かうして僕が君達に過去を語るのを、光子も何處かで聞いて喜んでくれたらと思ふんだ。

長話をしてしまつたなあ。

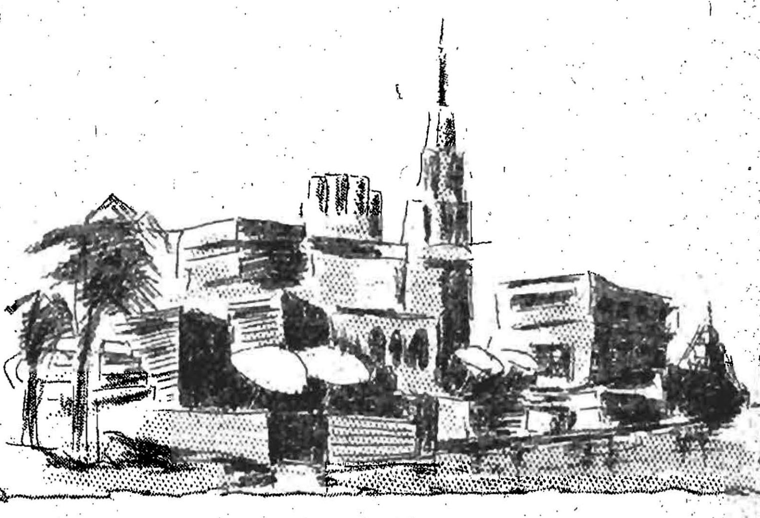
今夜は実に静かな夜だ。

今夜はゆつくりして泊つて行きたまへ。

（終り）

榕樹の記録

此の頁の空白は、「榕樹」への希望と思出に埋る。



新しい研究

原谷育夫

序

ともしび消えて
しじまの闇が
いつか私に迫つて来るとき
すきまもる風と共に
淋しいメフィスト奴の
あの聲が今日も亦
無限の
彼方へひきよせるのです

反抗

悪魔！
いくらやつても解けない悩み
あれ程苦心した実験方法は正確なのに
データーが
データーが信用出来やしない

今日もアムスラーの大きな腕が
鐵の苦しそうな
悲鳴を抱き上げる
キー、ぐぐぐ
ぎぎー、がちやん
どこかで聞える
「俺は殺したのだ」
鉄は
鉄は生きて居る

あれとこれと
いや
それとあれと
いろいろ組合せを替えてみる
そして都合のいゝ結果だけを取出して
理論は理論さ

ぬめぬめの微妙な変化が
お前たちに分るものか
学問は深遠だよと
漫画のような真剣な顔をしているのが
おかしくつて仕方がない

あ
もう少し予算があつたら
一萬分の一まで正しく計れたら
こんなに苦労をしないものを——
古ぼけた
前世紀の測長器が
べそをかいている

こんなに貧しい私たち
それでも研究が
大切だと見せかけて
愛の上でごまかすのよ
十九世紀のアカデミズムス

孤高の美だとうぬぼれる
冷い冷いまなざし

ひとりよがりなテオリドが
どれだけ真理を招くのだろう
石頭には
能〳〵だ
もう少し掘り下げて
もう少し考えて

外では風が吹いている
私達を呼ぶ声が大きく聞える
小さい小さい存在が
連関もなく
淋しく孤立するとき
それはいくらの價値があるものだらう
私は行こう
人民廣場え

行進

私は黙つて歩いている
どこから民衆の歌がこだまする
それでもあの旗はなく
しづ／＼と行進は続く

お葬式のようだと
いふけれど
それでも私は知つている
赤旗が揺れたのは
一年前のこと
まじ／＼と
革命の日を想うとは
誰の詩だつたかしら
破れた靴に継ぎだらけのシャツ
油のにじんだ菜葉服さえ
機械の動いた頭を傾はせる
悲しい暗い行進

しかし私にはよく分る
働く者が働く者が
美しい世の中を作るのだ
秘めた決意に輝いた
隣りの同志の瞳が
無言の笑みを返す

「学者も人間
喰わせて下さい」
嗤！
それでもしかし世の中が
これで変るというのなら
そうそう風の吹く中を
その風を突ききつて
私は走つて行くだろう

世の中は
世の中はまだ／＼
私達が住めるようには出来ていない

働くものの力働く者が
逞しい足取りで
新しい世界に進むのだ
やがて
やがて分るだらう

結

煙草を燻ゆらせるたまゆらに
ふと何かその身の愚さを知る

今日
希望の旗が落ちた
大きな川の流れのように
私は人と訣れよう
次に私の足跡が
木枯しが
あくなに吹いてゐる
しかし私は行かねばならなかつた

真理と自由とは
永遠に美しく
死の十字架であるかも知れない
それも今は
瞳の色の輝きに
しばしもあえず佇まうよりも
やさしく私を誘つてくれる
doch einmal
と言つた昔が恋しい
たが
時、世を導いて行く
赤い狛火なつかしみつゝ
さようなら
さようなら
オポチュニストよ
大きくなりませう

P42は欠番

信念の愛情

(6)

とりる・たつま

午后のこと

一九四七年も将に暮れようとしていた師走の日。どんよりと曇って雨でも降りそうな天氣だった。

しめ飾だ、門松だ……と飾付だけでも大騒ぎしていた戦前の頃に較べると、確かに一抹の淋しさはあったが、それでも流石に年の暮ともなればなんとなく慌しい。

「魚の配給だっせ」と、メガホンで大声でどなりながら配給所のおやじがねじ鉢巻も勇ましく通り過ぎて行ったかと思へば、その聲のまだ消えないうちにもう「野菜の配給だっせ」と、いなせな若いあんちゃんがさも忙がしそうに身体をふりふりガタガタいはせて自轉車で通り過ぎて行く。まるで今年も冬を待っていたかのように十二月の声と共に蔓延し始めた發疹チブスの防疫雑役夫として、DDT撒布のアルバイトに昨日まで従事していた信吾もやっと今日からは自由の身となって、なにもしなくてはならないといふ用事もなく、先刻から一人机に坐ってガラス越しに映るそれらの氣ぜはしそうに行き交ふ人々を眺めていたが、なんとなく落着いた氣持になれなかった。

『なぜ人はあゝ忙がしそうにするのだらう』と信吾は、行き交ふ人々が無理に忙がしそうにしているように感ぜられ、滑稽だと思ったり、『あの忙しさは凡そ俺とは無関係なんだ』なぞと考えたりしてゐたが、時間と共に益々いらいらしてくる氣持をどうする事も出来なかった。そして、そうした信吾をいら立たせる原因が試験が迫ったといふためでもなく、小説が書けないといふためでもないといふことが、信吾には分りすぎる程分っていた。分っていながらそれを否定しようとさっきから、内心焦っていたのである。それは敏子のためだった。そして信吾はどうしても否定しきれない自分自身を發見した時に『勝手にしろ』といふ氣になれない自分の氣弱

はさがいまいましくてならなかった。

信吾が敏子と初めて知り合ったのは町内に青年文化會が出来た時だった。中学校を出てから専門学校、軍隊と凡そ八年の間、家から離れていた信吾は復員后は近所の知己もなく大学へ通ふ以外は滅多に家から外へ出た事もなかったが、どちらかと言へば、土地では古顔で、その上年長者でもあったところから、『青年文化会を作るので一つリーダーになってくれませんか』と頼みに来られ、信吾自身もかねがねそうした会の有意義性を認めていたし、会を通して信吾達の勤労者階級の文化的な教養と若い者の手の中から、盛り上げてゆかねばならないと思っていた矢先なので、早速承知したのである。勿論その時から信吾は敏子が青年會の一メムバーだといふ以外には特別の感情なぞは微塵も持っていなかったが、只文化會のメンバーの中には敏子のように専門教育迄受けていた女性が非常に少なかったので、信吾が敏子に大きな期待をもっていたことは事実だった。信吾はあらゆる努力を惜まず青年會のために働いた。お互ひに階級的な意識を強め、文化的な教養を高めてゆこうと励まし合ひ、暇を見つけては討論し合ったり、讀書会をもったりした。敏子も同じようにつき合っていたが、敏子が一番真剣にやってくれると思っていたのである。ところが敏子は信吾の思っていた女性と正反對の性格の持主だった。人間だけは良かったが『お人善し』といふだけで、まるで政治や文学などが理解出来る女ではなかったし、又理解しようとはしなかった。敏子は大の宝塚ファンで『ヨッちゃん』だの『ミーちゃん』だのとさえ言っておれば、機嫌のいい女だった。余り氣乗りもしないのに信吾と二、三度言葉はれて、宝塚之つき合った事もあった。本といえば、くだらない恋愛小説をよむ位が関の山だった。敏子はそんな女だった。それでも信吾は根気よくなんとか分ってもらほうと頑張った。色々の問題をとり上げては敏子に話をした。時には敏子に階級意識を自覚させようと、二人な自分の苦い体験を話した事もあった。

「僕は、大阪でも有名なブル中学へは入ったばかりに本当につらい中学時代を送って来たのです。今思ひ出してもむらむらと激しい怒がからだに湧いて来ますが、その時にいつも『俺は立ち上るんだ。俺達勤労階級のために屹度立上るんだ』といふ強い階級意識と矛盾した社会機構への反逆心とを持ち續けて来ました。今からふりかへってみて、若しあの時に僕が階級意識を持ち得ない弱い人間だったら、屹度堕落の坂をまっ逆さまに轉げ落ち、とんでもない不良の群に身を投じる結果になっていると思ひます。僕が中学の教師からどんな扱ひを受けたかといふ一例を擧げればこんな事もあったんです。

僕が無産者階級の子であるといふだけの理由で校内に盗難事件があった時、犯人の嫌疑を僕に掛けられたのです。その時の僕の氣持はいふに言へないものでした。察してもらえば分ると思ひます。その事件は僕自身の手で、犯人をひっつかまえて解決したんですが、その犯人は有名なブルジョアの坊々でしたがね、全く世の中って皮肉なものですよ。

又時には高等教育を受けたといふことを鼻にかけている敏子に、只教育を受けただけではそんなにもならないといふ事を分ってもらほうと、戸坂潤の〃インテリゲンチャ論〃などを

をもち出したりして随分きつい言ひ方をした事もあつた。

「敏子さんは二言目にはインテリだとか、インテリ階級だとか言つて何かインテリが偉い人間であるように思ひインテリ階級といふ特別の階級があるように思つておられるのではないかと、僕には見受けられますが、若しそれが本当であつて、あなたが高等教育を受けているから、インテリだなくて思つているなら全くナンセンスですよ、教育を受けているからインテリジエンスを持つていると思つているなら、大間違ひですよ。戸坂潤氏が言つてるように、インテリジエンスは人間の感覚に直接連る感能で、労働者だつて自分の社会階級上の利害関係を本能的に又分析的に感受することが出来れば、その労働者はインテリジエンスをもつていると言えない事はないでせう。決して学校教育や、ただの智識や学殖がインテリジエンスではないのです」

そして又こんな事も信吾はよく言つた。

「僕達はつねに自己の能力をよく知つておくことが大切だと思ひます。『自分はつまらないだ』と極度に自己卑下し自己を促之て置くことが大切です。その意味でつねに自己を外部にとり出して客観的に自己を眺めてみることが大いに必要だと思ひます。大した実力もないのに大きな顔をしている程つらいことはないもので、いつもデロデロと自分の無力を眺められているような圧迫感を感じるものですよ」等……。

而し信吾の敏子に対する努力も仲々酬ひられなかつた。信吾の熱情も敏子には馬耳東風と言つてもいゝ位だつた。敏子のもつているプライドを傷つけないで敏子の階級意識をたかめ引寄せてゆくことには並ならぬ苦労があつたが、いつまでたつても敏子は現在の自分の殻から一歩も外へは出なかつた。

信吾は「俺にはもうこれ以上敏子さんを云々する力はないのだ」と幾度か断念しようと思つたかも知れなかつた。そして悲しくささえなる事もあつた。而しその度に『たつた一人の女を味方にすることも出来ないような人間で、何が出来るといふのだ』と自分自身を叱り、そして励まして、敏子に向つて行つた。

信吾の妹の友人で朋子といふ女性があつたが、朋子は信吾とは、いはゞ逆な立場に立つている。家庭の娘であつたが、非常によく信吾の思想を理解し、家庭と対抗してまで、正しい道を進むと信吾に誓ふのであつたが、朋子がそれ程迄に進歩的な考えを持つているのに反して、信吾と同じ階級の敏子が却つて自分達から離れようとしているのが信吾を尚更悲しませた。

ところがこゝに又信吾を悩ます一つの問題が起つて来た。それは敏子が信吾に恋愛的な愛情を露骨に示し始めたことだつた。信吾がそう感じた時は敏子の気持は、既に相当進んでいた。信吾は最初驚いた。そして次には苦しく思つた。それも信吾にとつては無理のないことだつた。信吾は敏子を仲間としては本当に心から愛していたが、恋愛的な愛情はたゞの一度も感じた事がなかつた。信吾は敏子の露骨な愛情表現の態度に触れて初めて恋愛的な立場から自分と敏子とを結びつけて考えた程だつた。信吾がそう感じてからといふものは、信吾の話すこと、なすこと、総てを敏子が信吾の自分えの愛情の表示だと解釈しているかのように思はれてならなかつた。事実又、そうであつた。敏子は今までまるで興味のなかつたことでも信吾が『好きだ』と言えば、必ず自分も『好きだ』と合槌をうつた。それが又信吾は耐らなく厭だつた。元来信吾は自分自身も心にもないうそをいふのは嫌ひだつたが、

又、人から見えすいた心にもないうそを告げられるのも大嫌ひであつた。

信吾はつねに"素直"をモットとしていた。信吾は敏子の態度をみていて、モンテルランの書いている"若い娘達"の中に登場してくるアンドレといふ女や、モンパッサンの"真珠の首飾り"に出てくる女を想ひ出し厭な気がする事が多かつた。「女は愛情しかもち得ぬ動物なのか」とさえ疑つてみたこともあつた。

信吾は敏子を仲間としては真に愛し、女としては顔をみるのも厭だといふ、こうした二つの感情のヂレンマに陥ち込みまるで泥沼をはつてるような暗い気持を抱いたまゝで、年の暮まで追ひ込まれたのである。

日が暮れて

いつの間にか放心したようにぼんやりと過去一年間の敏子とのいきさつを、あれこれと想ひ出していた信吾が、『そうだ、Kに手紙を書くのを忘れていた』と思ひたつて我に返つた時は、辺りはもうすつかり夜の帳に包まれて、ついさつき迄、あれ程騒がしかつた表通りは、犬の子一匹さえも通つていないかのように静まりかえつていた。いつ終止符がうたれるともおよそはかり知ることの出来ない鰻上りのインフレ恐慌とマッチして最近益々厳しくなつた、電力飢饉にともなふ制限は、年末さえも家庭にともしびを與えてはくれなかつた。信吾は手探りで本箱の上におかれてあつた小さな石油ランプをとり出してマッチをすつて火をつけた。ボーッと燈芯が燃え上り、瞬間パッと明るくなつたが、直ぐ又小さな暗い灯となつた。それでもパチパチと二三度小さな音を立てゝ燈芯が本格的に石油を吸ひ始めると、小刻みに揺れていた焔も安定し、どうにか本でも読めるような灯になつた。信吾はペンをとつて「拝啓」「拝啓」と誰もが考えながら、文章を書く時、よくやるように暫く落書していたが、垂れ下つて来る髪がいかにもうるさくて仕方がないといふ風にグッと頭を突き出して上下に大きく首を振つてから一気に手紙を書き始めた。

K君。その后相変らず悠長な日を送つておられる事でせう。君と一度膝を交えてゆつくりと話し合ほうと思ひ乍らも、君と違つて貧乏書生の悲しさで、ついついその暇も見出せず、今年の暮まで追ひ込まれて了ひました。而し矢張り今年の問題は今年のうちに解決しておきたいと思ひますので、今あわてゝ手紙を書き初めた次第です。全く月日のたつのは早いものですね、君の卒業送別会をやつたのが、つい昨日のような気がしてならないのですが、もう年の暮までやつて来ています。そうそうあの時は、君は随分酔つぱらつて京都のあの人通りの中で、見事な隊列を並べ乍らも、快（こ）気焔をあげたのを覚えておられますか、そして僕は平素議論そのもの、顔をしている君から、厭と云ふ程、ノロケ話を頂戴し、内心オツたまげたものでした。そしてどうやら酒を飲ませば、君のよく言ふ「インテリとしてのプライド」

そして強くなるためには、人間は人間の欲望を素直に肯定しなくてはならないのです。

も怪しいものだと思ひましたよ。扨て憎まれ口はこれ位にしておいて、これから今年中君と議論し合つて来た「慾望の問題について」結論をつけたいと思ひます。

再三、再四繰り返してきた事なので、人間は本能的な側面と理智的な側面との二つの面をもつているといふ事は、充分お分りの事と思ひます。ところが僕達若い時代の者――特に歪んだ教育を受けた僕達――は兎角この人間の本能的な側面を逆少軽侮したがる傾向が強いのです。そのことから人間の本能的な側面を醜悪なものだと考へたり、君の言葉をかりれば下等な人間――無教育の階級――だけが、そうした側面をもつており、インテリつてこと言はれる人間はまるで理智的な側面だけしかもつておらないといふ風なろくでもない考へをもつようになるのです。或は又よしんば人間である限り、そうした側面をもつており、それが、非常に悪いものだ」と分つていながらも、そうした側面に黒いベールをかぶせて、現実に見ないようにするのが、何か立派な人間だといふ風な誤つた考えをもつようになるのです。それが證據に、僕が一寸性慾の問題にふれただけでも、まるで僕が工口漢でもあるかのように君達のグループは吹聴し、自分勝手に「僕達の青春の夢を破壊する男だ」と騒ぎ立てたではありませんか。そして君達は小説的なロマンスを憧れ、プラトニックなラヴが恋愛の最も美しいものだと思つているのです。僕は君達のそのような考えは、全く幼稚でナンセンスだと思つていますが、そこに君達をはじめ、君達グループの一番大きな危険性があるのです。

信吾は、こう迄書いたが又いらいらし始めた。こうなりかけるとみるみる内にそのいらだたしさが身体一杯に拡がつて、かきむしりたいような衝動にかられて、じつと坐つている事が出来なかつた。長い二本の足を机の下に押し込んで、頭をかゝえ乍ら寝ころがつて眼を閉ぢた。

頭の芯を中心に波紋が拡がるように幾つもの輪があわただしくぐるぐると舞ひ乍ら、あとからあとからと拡がつては消えて行つた。そしてその輪の間から敏子と和子との顔が浮んでは沈み、沈んでは又浮んで来るのだつた。肉体的には愛するどころか、「嫌な女だ」とさえ思つているのにどうしてこう迄敏子のことが気になるのか、信吾自身も皆目分らなかつた。それ故にこそ敏子のことを考え出すたびにいらいらするのだつた。

母親もどこかへ出掛けて行つたのか、家の中はひつそりと静まりかえつていた。「ボンボンボン」と静けさを破るのが無気味だとでもいふように時計が鈍い音で六時を打つた。今迄死んだように転がつていた信吾は、むつくりと身体をおこした。いらいらしていた気持は幾分おさまつていた。而し手紙を続けて書く気にはなれなかつた。それでも「之だけは書くんだ」といふ心に追ひたてられて再び机に向つてペンをとつた。

本能的な側面に黒いベールをかぶせる者こそ、えせ紳士であり弱い人間の中でも一番弱い人間だと思ひます。勿論人間は弱いものです。弱いが故に強くならなくてはならないのです。そして強くなるためには、人間は人間の慾望を素

直に肯定しなくてはならないのです。君達はもう一度「人間は人間であると考へる前に動物である」と言つたことを記憶しておかねばならないと誰かの言つた言葉を想ひ出す必要があるでせう。而し僕は決して本能的な側面だけが人間の総てだとは決して言つているのではないのです。本能的な側面をそのまゝ押しつめて行けば直ちに行き詰つて了ふといふことは百も承知です。たゞ僕の言ひたい事は、本能的な側面を否定したり、軽視したりする者は、いくら美辞麗句を並べて人間の問題を云々しても、つまるところは封建的な束縛や欺瞞に対しては絶対に人間的であり得ることが出来ないと言ふことです。だから逆に僕達はそうした側面を、素直に肯定することによつて社会的政治的諸関係の中に於て、人間生活の真実を見出してゆかねばならないのです。勿論慾望否定をどうあらはしてゆくかといふ事がこゝで問題となるのです。

信吾はやつとの事でこゝまで書いたが、どうしてもその先を、書く事が出来なかつた。焦れば焦る程書けなかつた。ペンをとつたまゝで手を挙げて「アーアーアー」と不自然なあくびを連発し、二、三度首を左右に振つてから、いまいましそうにペンを机の上に投げ出した。「矢張り俺はもう一度敏子に会はなくてはならないんだ」と心の中で叫んで立上つた。

その夜

豆ランプのうす暗い光線の中に火鉢の炭火は真赤に燃えていた。奥の間では敏子の父の陽三が「フウーフウー」と疲れた寝息をたてゝ眠つていた。

すぐ横のふとん炬燵には和子が足を突込んで背中を壁にもたせかけ眼をパチパチさせ乍らおませな表情で敏子達の話を聞いていた。

和子は敏子の妹でまだやつと女学校の三年生ではあつたが、誰が見てもそう思えない程しつかりしていた。総ての点で敏子とは違つていた。外観に於ても敏子はずんぐりと肥えており、お盆のような丸顔に象の眼のような細いやさしい眼に、調和した丸い鼻とをもつており、みるからに「お人善し」といふ印象を人に与えるのに反して、和子はからだつきもすんなりとし、どちらかと言えば面長で、二重瞼のパチツと見開いた澄み切つた眼をもつており、鼻すじの通つた彫刻的な顔立で、いかにも聡明で理智的な感じを与えていた。性格に於ても敏子がおしやべりで、賑やかで、そのくせ臆病で消極的であるのに反して和子は平素むつつり屋と言はれる程の無口で、黙つているが、何か事をする時は「あの子にあんな一面があつたのかしら」と人を驚かす程の大膽さと勇気と積極性とをもつていた。信吾さえ和子には時々ハラハラさせられる事もあつたが、信吾は心から和子が好きだつた。

敏子は編物をしながら、今日見てきたといふ「土曜夫人」の説明を長々とするので、信吾は仲々話を持ち出すチャンスを促える事が出来なかつた。やむなく、信吾は黙つて、それでも合槌だけはうち乍ら敏子の話を聞いていた。而し信吾にとつては敏子の話は全く退屈至極なものだつた。信吾は映画は決して嫌ひではなかつた。否寧ろ好きな方だつた。映画に

ついても敏子の話はいつでも批判的な角度からは少しも説明しないで、たゞ筋書をくど〳〵としやべるのが関の山だつたからである。そうこうしてる内に長い敏子の説明がやつと終つたので、

「敏子さん」

といきなり信吾は自分の話を持ち出そうとぞこまで言つたが、なんだか辺りの空気と自分のこれから話そうとする事柄の内容とがピツタリと来ないように思はれて、内心それ具く感じ乍ら、こう言つた。

「確か土曜夫人は織田作の原作でしたね」

「えゝそうよ」

と敏子はさりげなく答えた。それから信子は今迄の敏子の話にウマを合せるように、織田作の死んだ事や、彼の作品などについてシヤベつた。そしてシヤベりながらも内心自分の話を切り出すチヤンスを窺つた。話が大阪の小説家に関連して織田作から武麟えと発展しかけた時、敏子が一寸席を外したので

「此頃どんな本を読んでるの」

と信吾は和子に向つて問ひかけた。年こそゆかないが、信吾と同じ目的をもつて同じ組織の中で闘つている和子とは、信吾はなんとなく話し易かつた。又いつも和子には話し甲斐を感じていた。敏子があゝした女だけに尚のこと和子にそう感じるのかも知れなかつた。

「信吾さんからお借りした、デイミトロフの〃人民戦線の諸問題〃をよんでいるんですけどむつかしいわ」

「むつかしかつても苦労してよむことがいゝ勉強になるよ」

「私ね、今の内に基本的な理論をしつかりつかんでおきたいと思ふわ、信吾さん入門書のようなものがあつたら貸して頂戴よ」

「うん、今度来るときもつてくるよ」

などと信吾が和子と話している中に敏子が茶を入れて戻つて来た。信子は『今がいゝ』と心で思つて敏子が「どうぞ」と茶を信吾にすゝめ、再び編物を手にするなり、話を切り出した。

「敏子さん、実は今日やつて来たのは、今年中何度もあなたにお話しした事をもう一度聞いてもらほうと思つたからなんです。あと三日で新しい年を迎えようとしています。『またか』と思はず今年の聞き収めだと思つて聞いて下さい」

「なんの話ですの」

と敏子はまんざら分らぬこともないのに、態ととぼけてそう言つた。

「今から話しますよ」と前置して

「敏子さん、僕はあなたが、高等教育を受けているということをもう一度はつきりと自覚してほしいと思ふのです。今日の矛盾した社会機構の下で、僕にしても、あなたにしても勤労階級の子でありながら、高等教育を受け得たといふこの事をもう一度考へ直してほしいと思ふのです。僕達階級としては、非常に恵まれた條件の與えられる者は千人に一人もあるかない位です。このことをはつきりと自覚しているならば、教育を受けた僕達が『自分さえ良ければいゝんだ』などとは到底考えられなくなるでせう。そしてあなたや僕は、僕達の階級の中から『選ばれて教育を受けたんだ』といふ違つた意

意でのプライドと階級に対する強い責任感が、当然僕達の気持の中に現はれて来なくてはならない筈だと思ひます」

とこゝまで信吾は一気に言つて一息入れてから

「僕達は階級のために斗はねばならないのです。僕達は片時も自分の両足を置いている階級を忘れてはならないのです。教育を受けた僕達の使命は実に大きいのです」

と信吾はたつた今迄著[illegible]まじりに微笑を含めてシヤベつていた表情からうつて変つたように真剣な顔付で言つた。

「…………」

敏子は一寸顔を歪めただけでなんとも答えなかつた。そしてせつせと編物の手を動かしていた。信吾は無表情にうつむいている敏子が小憎しいと思つたが、『怒つてはいけない』と腹の中でつぶやいて気を休めた。戸外は何時の間にか雨になつたのか静寂の中にピチ〳〵と小さな音をたてゝいた。信吾は話を續けた。

「敏子さん・僕と小学校の同級だつたMを憶えているでせう。」

「えゝ知つてるわ、あの人どうかしたので」

と敏子がはじめて答えた瞬間。パツト電燈が點つた。

「まあ嬉しい」

と言つてまぶしそうに目ばたきし乍ら敏子は豆ランプのスヰツチを切つた。そうしながら興味深そうに信吾を見て、

「Mさんがどうかしたの」

とさつきと同じ言葉を繰り返した。

その眼が『早くその先を』と言つているのが信吾にはありありと感じられたが、次に語る事柄が敏子の期待しているような話とは全然違つてことを信吾は知つているので殊更に落着いて言つた。

「僕はあの男に憎しみを感じているのです。いやあはれみを感じていると言つた方が適当かも知れません。あの男は小さい時から神童とまで言はれ小学校の五年から中学へ進み、更に高等学校を経て優秀な成績で大学を卒業したのです。彼が僕達のトツプを切つて大学を卒業したといふ知らせを受取つた時は本当に吾が身のことのように嬉しく思つたのです。彼こそは彼の天才的な才能を発揮して必ず僕達の階級のために、僕達の後からやつてくる幼い後輩達のために闘つてくれると信じていたからです。

ところが僕は見事に彼に裏切られたのです。彼は今反動陣営のまつさきに立つて僕達の勤労階級を食ひ物にしようとしてゐるのです。彼は又自分のボス的な地盤を固めようとの野心から、学士といふ肩書だけを餌にして虚栄とレツテルとしている某ブルヂヨアのお嬢さんと結婚し、のう〳〵とおさまり返つているのです。結婚したのがどうのといふのは第二の問題として、僕は彼が僕達の階級を見捨て去つたといふことに憎しみを感じるのです。恐らく今の彼なら昔の僕達仲間から声をかけられれば見向きもしないで、『厭な奴だ』と位に思つて素知らぬ顔をするでせう。僕は彼の態度を徹底的に批判すると共に僕達もう一度自己批判する必要があると思ふのです。敏子さん、あなたはそんなMをどうお考えになるのです」

「どうつて……人間なんて皆そんなものでせう」

と敏子はもう一度ふりかえつて考えてみようとする気配も

もなくさりげなく言つた。

「当然だと言ふのですね」

「……」

「本気でそう思つているのですね」

と信吾は興奮しながら感情的な声で再び敏子に問ひつめた。

「そうおきなられたら困るわ、而し信吾さんだつて名誉や地位は惜しいでせう。」

と敏子は冷たく信吾は問ひ返した。

「そりやー……」

と信吾は大きな声でそこまで言つたが、瞬間、胸がつまつてあとの言葉が出なかつた。信吾の声があまり大きかつたので敏子は思はず編物を手から落しておののく表情で信吾を凝視した。二人の視線がぱつたり合つた時、信吾はスーツと壁際にしりに感情が沈まつてゆくのをはつきりと意識した。次の瞬間全く興奮していた自分に気がさして、すぐ感情的になる自分自身に厭な気がした。そしてその次に甘こんな女に話をするだけ馬鹿らしいと言ふ気持が起つて来た。信吾はスーツと壁際こうと思つて焦つた。敏子の視線を外して天井を見上げた。暫くと二人の間に沈黙が続いた。敏子は再び編物を始めた。前子も、ばたから黙つて信吾を眺めていた。

……適熱器にかけてあつた茶瓶が何時の間にか沸き立つてシューンと蒸気を吐き始めた。感情をおし鎮めて徐らに信吾は言つた。

「そりや人間には誰だつて慾望はあるものです。肉体や意識をもつ生きた人間である限り。自分自身が一番可愛いくないといふ奴があつたらそいつは、大ウソつきですよ、僕だつてエンゼニヤーとして身を立てようといふ理想もあれば、希望もあり、永表だつて信じているのです。なにもこの子が、自分を束縛するのでもなければ、自分の行動と矛盾するものではないでせう。たゞ問題は自分さえよくなればいゝといふ気儘勝手な行動をとることと、階級意識を持つて了ふといふことなくです。僕達が団結してやらなければ一体誰が僕達の受けて来た無産階級としての苦しみを再び僕達の後からやつてくる子供や弟に味はせないようにする事が出来るでせうか。ほつて置けば誰かゞやつてくれるとか、自然にこの矛盾した社会が崩壊すると思つているなら大間違ですよ。僕達の手でたゝき壊はさない限り、壊はれつこないのです。」

紅潮していた信吾の顔の色はさめていた。敏子は編物の手をとめて、何か言ほうとしたが、信吾が直ぐ話を続けたので思ひとまつて、一寸火鉢に手をかざしてから又編み続けた。

前子はうなづきながら聞いていた。

「いかに天性や素質があつても貧しい職工の家からは沢多にすぐれた文学者も哲学者も出なかつたのです。同じ人間の子として生れながら、人間としての高さにたどることの出来ない怒を、あなたは感じないといふのですね。阿呆であらうが、悪性ひであらうが、地主の子は高慢民の上にたつ地主となり、経済的な才能があらうが、なかろうが、資本家の子は資本家となり、労働者の子を尊つて徒食する、こんな社会が敏子さんは当り前だといふのですか」

と信吾はつとめて気を落ち着けながら言つた。そしてやゝ疲れたようにぐつと肉を張つてから茶を飲んだ。

「当り前だと思つていませんわ、信吾さんの話はよく分りますわ、だからといつて今迄の私のどこが悪いと言はれますの、そして一体私がどうすればいゝと言はれますの」

と不服そうにふくれて敏子は言つた。

「いや分つてもらえば結構なんですよ。きつい言ひ方ですが僕からみた敏子さんは肉体を失つていると思ふのです。」

「肉体を失つているつて」

と敏子はおうむ返しに両手を行儀よく膝の上に重ねた姿勢で言つた。

「あなたはあなたの両足が労働者階級にある事を忘れて頭だけでブルヂヨアへくつついているのです。つまり肉体を失つているから、足下が分らないのです。そこで肉体をとり戻してもう一度足下を見直さなくてはならないと僕は言ふのです」

と言つてから信吾は一寸敏子をぬすみ見した。敏子はしよんぼりとうつむいていた。

「どうしたらいゝつて、なにもむつかしい事はないですよ自分自身を愛するように、階級を愛することが出来たらいゝんです。そしてまず手近な封建制から打破してゆけばいゝんです。つい手の届く家庭の中にも僕達のやらねばならぬ事が山程あるのです。なにも飛び出して、僕達の階級に大声で呼びかけるだけが決して実践行為だとは言えないでせう。僕達はまず自分の中に根強く巣くつている封建的なプチ、ブル的な観念を一つ一つ取り出して実践を通じてたゝき殺してゆく事が大切だと思ふのです。そしてこの際特に大切なことは封建制が外部だけにあるのではなく、内にもあるといふことをはつきりと自覚して置くことです。この事を絶対一人といふ人が非常に分りやすく説明しています。「日本の労働者と農民もインテリゲンチヤもみんな専制主義者や帝国主義者の支配に都合のいゝような観念や習慣が植付られており、そのような観念の習慣や観念が生れ乍らにして、乳とともに吸はれて、僕達の血肉となつているしといふ事を指摘し、「自分の家に入らぬものや不正と認めるものを批判し、之と闘ふことは、まだやさしいが、自己自身の一部となつているものに批判の眼をむけて、これを変革することは一層困難だ」といふ意味の事を述べていますが、確かにするどい所を言ひ当てていると思ひます」

と信吾は眼を立てかけたことなどすつかり忘れて了つたかの様に熱心に話し続けた。敏子も信吾の話に魅されたように編棒を握つたまゝで首をかしげて聞いていた。時間が遅いといふのに前子もねむそうな顔もしないで聞いていた。

「ごに角、僕等は多くの封建的、ブルジヨア的、偏見と習俗から脱脚して、真にプロレタリアートの歴史的使命を自覚してこそ始めて新しい人間になることが出来るのです。」

と信吾が言ひ乍ら火鉢に顔を突込んで煙草に火をつけかけた時、突然縁側にいた陽三が、コフーンとあくびをし乍ら眠を八の字に腕にてのびをした。二人は思はず顔を見合した。陽三は起きて来て、眠を擦り乍ら、

「信吾はんが来てはつたんか、信吾はんの言ひはることは一々たもやん」

と言ひつゝ電燈を背にして信吾と敏子の間に座つた。

「おおさん、聞いてたんですか」

と信吾は一寸とはじらひ乍ら陽三に問ひかけて、吸ひかけた煙草を親指と人差指の間に持ちかえてつゞけざまに二、三服吸つた。

「いやほんの今眠が覚めて、一寸聞いただけやけど、いつもから信吾はんの言ひはる事には、感心してますのや」

「そう言はれたら全く恐縮です」

「いや、お世辞やおまへんぜ」

と陽三は艶々した顔に手をやつて言つた。

陽三はみるからに人なつこい好々爺といふ感じのする人柄で、亀のように首をすぼめて、北國なまりの抜け切れない大阪辯でしやべる恰好は、全く愛嬌があると言ひたい程だつた。

「子供は早う寝なあかんぜ」

と陽三はいかにも父親らしい慈愛のこもつた声で利子に向つて言つた。

「まだねむくないわ」

と利子は自分だけが子供扱ひにされたのが不服なように答えた。

「ねむとのうても、寝たらねれるもんや」

「ねむたくもないのに、眠むれるものと違ふわ」

「明日起きられへんで」

「此度、早く起きるわ」

と利子は強情に言ひ張つた。それ以上陽三は利子に強制しなかつた。言ひ出したら、一寸位であとへ引かない意地ッ張な性格を利子がもつているのを陽三はよく知つていたからである。

敏子は信吾の話を考へ直しているのかぼんやりと打沈んで、灰の上に火箸できれいな縞模様を画いていた。

むき直つた陽三は一寸改つた口調で信吾に話しかけた。

「信吾はん。わしなんか三十年もといふ間、一日も休まずあくせくと働き続けて来たもんや、それがいつの間にか年をとつて、近い中に今の働いている所をやめにやならんようになつたんですが、若い時からこの年まで〃働き続けて来たので、せめて今からはやれ〳〵と腰の骨でも延ばせるといふのなら話も分りますのやが、わしなんかそんな所やおまへんわ。利子もまだ十六やし、之から又一ふんばりせななりまへんのやさかいにな。とにかく今の世の中は真面目一方でこつ〳〵働く人は、いつ迄たつても楽な暮しはでけしまへんのや、そのくせ、こすうに立廻つて人の頭をはねてる奴は、結構贅澤に暮してると言つたあほらしい世の中だんな」

眞実程強い力はない。信吾は聞いていて強く胸をうたれた。そして新しい勇気がもりもりと湧いてくるのを覚えた。『俺はやるぞ』と固く心に誓つた。……又暫く三人の間に沈黙が続いたが、腕組していた手を袖からぬいて膝え移し乍ら、陽三が口を切つた。

「而し信吾はん、わしは自分が苦しい体験を嘗めて来たさかい一番よう信吾はん言ひはる事は分りますのやが、年が年やさかいもうあきらめてまんのや、もう一とふんばりと思つて、も棺桶の方が先にお迎えに来てくれますわ、そうやさかいに、近頃は半分やけくそで『世の中なんかなるようになれ』と思つてまんね」

「いやおぢさん、年が年だからどうでもいゝといふ考えは

正しくないと思ひますよ」

と信吾は遠慮深く言つた。

「……」

「僕はおぢさんの社會に投じられた三十年間の苦労に對しては心からの尊敬の念を捧げます。この気持はとても言葉では言ひ表はす事は出来ません。而し年が年だから世の中はもうどうなつてもいゝと言はれるおぢさんの考え方は、僕には絶對に承服しかねます。僕達の本当の味方であるおぢさんからそんな事を言はれると悲しくさえなつて来ます。おぢさん達こそ、その貴い体験を生かして、未經験な若い僕達を励ましてくれなくてはならないのではないでせうか。そんな考へ方をしているのは、決しておぢさんだけではありません。僕達の階級の年とつた人はみんなそれに似た考へ方をしているんです。恐ろしい事だと思ひます。

僕のおふくろにしたつて、『信吾、私にはよく分らないが、お前は二口目には資本家の奴隷になつているとか、搾取されているとかいふけれど、それが当り前の世の中なんですよ。神様や佛様のお造りになつたこの世の中はいくら、お前が力んでみたつて、神様や佛様がお造り替えにならない限り、どうなるものでもないと私は思ひますがね、一家の者が皆働いて、どうにか食べて行けたら、それで結構だと私はいつも神様に感謝しています。お前もどんな境遇に立つても、自分の境遇に感謝しながら生きてゆけば、間違ひはないのですよ、世の中は上をみればきりがないし、下を見ればきりがないのですからね』と、いつも僕にこう言ふのです。こうした僕達の階級の年寄の考えは、大きな問題だと僕は思ふのです。と言ふのは、それが年寄だけですめばいゝんですが、そうした考えが若い時代の者に強く影響しているからなんです」

と信吾はなんとか分つてもらほうと懸命になつて言つた。

陽三は信吾の話の一區切毎に「ウン」「ウン」と首をふつてうなづいていた。陽三がうなづく度に襖に大きく映つている陽三の影法師が同じようにうなづいた。

「一寸話がそれているかも知れませんが、東條やその他の戰犯者達も『まあどう行つてもそう長くもない生命だし、負けたところでもともとで、うまく行けば死後の花が咲くといふものさ』といふような全く身勝手な無責任な態度で、戰争をぶつ始めたのだと僕は思つています。國民を無理やりに戰争に追ひ込んで、その結果犠牲になつたのは誰なのでせう。東條でもなければ、将軍でもありません、悲痛な思ひを抱いてシーサイド、ボンブの露と消えた特攻隊員や、何年といふ長い間、たゞ〃服従〃の二字でかんじがらめに縛られて、何時死ぬとも知れない戰線で遮二無二こき使はれたのは、みんな僕達若い青年ばかりではありませんか、その上年のいかない学生や生徒まで、学徒動員だ、やれ挺身隊だと追ひ廻されて来たのです。今度、東條が東京裁判で『正当防衛でやつたんだ、日本を救ふためにやつたんだ』とわめいたところで、それがよし事実であらうが、なかろうと、幾百萬の青年達の若い生命と青春とを奪つただけで、東條が死んで詫びたところで、追ひつかないでせう」

といつの間にか、又紅潮した頬を輝やかせ乍ら、火を吐くように言つた。

「信吾はんわ相変らず手厳しいなあ」

「……」

「信吾はんのおつしやる通りや、そう言はれたら、ほんまにわしら年寄ももう一度考へ直さないかんと思ひますな・分つていてようせん。『若しか』といふ時ばつかり考えて……わしなんかほんまに弱虫なんや」

と陽三は淋しそうに言つた。そして信吾の視線を避けるように火鉢に目を落した。信吾は思はず、眼頭が熱くなつた。黙つて火鉢を眺めている痩弱な陽三を堪らなくいじらしいとさえ思つた。そして言ひ過ぎたような後悔の念が起つて来た。何か言はなくてはおさまらない衝動にかられて口を切つた。

「おじさん。みんな僕達は本当の仲間なんですよ、之から僕達の階級は年寄も青年も男も女も一諸にがつちりと手を握つて僕達の文化をもち藝術をもつて楽しみ乍ら、力一杯働くことの出来る正しい社会を作りませう。」

「さう言はれて信吾はん、わしもなんとなく強い勇氣が出て来ました。たつた今から氣持を入れ替えて、うんと働きまつせ」

と陽三は自分自身にいひ聞かせそして信吾を励ますように信吾の肩に手をかけて、力をこめて言つた。

敏子の頬にも、和子の頬にも、強い覚悟の色がありありと現はれていた。

信吾の眼にキラリと一粒の涙が光つた。

そして翌日

朝。

「御免下さい。御免下さい」

と誰かゞ玄関で呼んでいる声に驚かされて信吾は眼を覚した。昨夜の夜ふかしがたたつて思はぬ朝寝坊をしていたのである。『ヨイショ』とかけ声をかけて飛び起きた信吾は寝巻き姿のまゝで玄関へ出て行つた。そこには和子が立つていた。

「和子さんか、早くから何用事え」

と信吾は襟をかき合せ乍ら尋ねた。

「早いこともないわ、今まで寝ていたの、寝ぼすけね」

と、和子はからかふように言つてから、一寸改まつた顔付になると

「これ、信吾さんに渡しておいてと姉さんに頼まれたのでもつて来たのよ」

と言ひ乍ら小さな封筒を差出した。

「姉さんはもう出勤したの」

「えゝ」

「何時書いたんかなあ……」

「昨夜姉さん寝なかつた様子よ」

「ふーん」

とうなづいて信吾は一寸考へ込むようにしていたが、思ひ出したように、

「わざわざ持つて来てもらつて有難ふ」

と礼を言つて封筒を受け取つた。

「いゝえ」

と和子は大げさな恰好で両手をキチン前へて延ばし、首を

一寸右にかしげて答へた。

「上つて行かない」

と信吾が誘つた。

「用事があつて急いでいるから失礼するわ……さようなら」

と言つたかと思えばもう「忙がしいんだな」と言ふ信吾の声が届かない距離まで走り去つていた。

ポツンと玄関にたゞ一人取残された信吾は、二三度封筒をひつくり返して眺めていたが思ひ切つたいふ風にピリツと一氣に封を破つた。

文面には、昨夜は眠ろうとしても、信吾の話した一句一句が脳裡に浮んで来て眠れなかつた事、そして自分の今迄の生活態度の誤つていた事が反省されて、自分にあいそがつきる程の後悔の念が起つた事、そして最後に、本当に今こそ新しい自覚を持つことが出来た事、等が走り書きで書かれてあつた。読み終つた信吾はこみ上げてくる嬉しさで泣きたいような氣持になつた。そしてもう一度丹念に読み返した。今迄むらむらとしていた敏子に對する感情が、すつかり自分の中から飛び去り、急に眼前が明るくなつて行くように感ぜられた。信吾は矢も楯もおれない氣持になつて寝巻の上からオーバーをひつかけるなり、机に向つてペンをとつた。

「敏子さん。僕は今なんと言つていゝか分らない程の大きな喜びで包まれています。あなたといふ一人の味方を得て百倍の勇氣が湧き上つて来ました。

次の時代を荷なつて立つ者は誰かゞ、どの階級かゞ、それは僕達であり、僕達の階級なのです。そして歴史の車輪はつい目の前までやつて来ています。今迄僕はあなたに随分きつい言ひ方をして来ました。それはたゞこの事を知つて頂きたかつたからなのです。

正しく歴史を洞察している人々は、たとえ自分がプロレタリアの階級に属していなくても、意識的に封建的、ブルジア的な見方と習俗から脱け出そうと努力し、プロレタリアの立場にたつて闘つているのです。僕の同志の駒村君も江川君もみんなそうなのです。こういふ人達の為る事を思えば、どうして僕達の階級の人間がぼんやりと傍観している事が許されるでせうか。之から僕等はがつちりと手を組んで團結し、新しい正しい社会、搾取なき社会、力一杯働く事の出来る真に自由な社会の創設に向つて邁進しようではありませんか。

若い時代!! なんと力強く響く言葉ではありませんか。愈々あと二日で一九四八年といふ新しい年を迎へようとしています。今こそ氣持を新にして残された僕達の末来を意義あらしめようではありませんか。敏子さんの今の自覚それを如何に実践して行くかといふ事だけが今後に残された問題です。僕は今後のあなたに絶大の期待をかけているといふ事を強調してペンを置きます。

こう信吾は一氣に書き下した。その時ふと「信念の愛情」といふ五字が信吾の脳に浮んで来た。今日は昨日とうつて変つたような晴天で、明るい冬の太陽が窓一杯に射し込んでいた。

（一九四七、一二、三〇）

美しき女性

森一

「ウーン」學生服にオーバを肩からひつかけあぐらをかいてゐた貞夫は、何かにつかれたようにうなりながら行儀よく座りなほし、ゴソ〱さぐるように兩手をズボンにおしこんだ。そしてもう一度ひろげられた園工のノートの上にある赤い罫紙をぢつと見つめた。

それには鉛筆で横書きした、ヒユーマニズム、ヒユーマニスト、リリシズム、リアリティ、パスカル、ディレッタンティズム、、、表愛、矛盾等、女にしては力強い字が四列に整頓よくギツシリつめられてゐる。かたはらの火の氣のない丸火鉢の向ふには若い娘には不似合な黑い事務服に緑のスエターをのぞかせた敬子が、働く女性らしくカサ〱した、しかし血色のよい兩手を戰時の名殘りと言つてはあまりにも時代後れな國防色のモンペの膝へおしつけ、その緊張した眞劍さを肩にあらはしてゐた。細いすくんだ眼は勉强の邪魔をするのではないかといふ心配と、異性に對する純眞な乙女心をあらはすかのようにオド〱した氣はづかしさに、はじめて理窟つぽい本をよんだ誇らしさが、入りまじり、キリツト結んだ小さな口もとには、彼女の負けぬ氣の勝氣さがうかゞはれた。

六疊の室には東北隅に灰ひ古したハゲたあかちやけのタンスと、それにならんだニスぬりの机、その上に壁を背にギツシリならべられた雜誌、乱雜につみかさねられたバイロン詩集、ドイツイデオロギー、機械工學、近代文學等にそれは貞夫の斷片的な思想をあらはすかのように雜然とし、西北隅には三、四枚の夜具が積のまゝ山をなし、上にちよこなんと茶色に白カバーをつけたマクラがすはつてゐた。

敬子の姿は、飾り一つない殺風景なガランとした部屋にはしつくりしてゐるが、何一つとして若い女性のはなやかさを見出す事は出來なかつた。強ひて求めようとするならば、天

井から下がつてゐる笠のない五の燭光で時々キラッと反射するブローチ代りをしてゐる事務服の赤い飾りボタンと衛を選した前のないパーマネンの清潔さとであつたが、それも黒い事務服と國防色のモンペによつて掩はれてしまふ感じであつた。

敬子は昨年の秋、貞夫らがつくつてゐるO青年會にN女學校五年のS子と共に入會して來た今年十九になるクビ飾り工場に働く女工であつた。

ザックバランをモットーとした会は、D工專Hの裏のない快活さと情熱的な眞實さの刺戟によつて、会が提唱してつくつた町の生活協同組合成立後、急速に会員間の親密さ、家庭の事情に立入つた人間的なつながりを持つようになつた。週に一度の二十數名の会の雰圍氣は、彼女を含めた比率にしては少い六人の女性をして一種の安心感と共に、夫々の形において、快活へ積極へと向はしめた。汚れない女性にあり勝な、羞恥と虚栄と陰險、そこからくる消極性が、徐々におされてゆくのを貞夫は他の者と違つた意味において嬉しく感ずるのだつた。

敬子はその中でも最も変化の著しい一人だつた。貞夫が大學の親友、島居、西らと飲んで二合の酒でだらしなく伸びた正月三日、会員は餅つきのアルバイトで得た金を僅かな燒酒に替へ、もちよりの肴と餅で、新年宴会といふには余りにもさゝやかな、しかし意義ある会合を持つた。その時おどけて無理矢理にのませたチヨク一杯の酒で出席してゐた三人の女性が、いひにくいであらう女性心理を、あたりの空氣に同調してさらけ出したのだつた。後でTは貞夫に「女つてみんなあんな事を考へてるのかなあ」と驚歎したように話してゐたが、貞夫には、試驗でこつそり山をかけてゐた公式が、さああそはめて下さいといつたように出された時のような感じだつた。

その時の敬子の言葉は印象的だつた。それは敬子と特に仲の良いS子とN子は、共にN女、Y女の五年生であつたが、彼女のみが家庭の事情で高等小學校へしか進めなかつた事、女工である事、顔がみにくくて氣になる事等、明かに自己卑下の氣持だつた。Hはその時、特有の毒舌口サと眞實を以て彼なりに元氣づけてやつたのだつた。

貞夫がその事を聞いた翌日、切羽つまつた冬期休暇の宿題を尋ねるため、S子とN子が貞夫の物置兼勉强部屋兼寢室、青年会集合場所の六疊、会での別名「別莊」へ、敬子を連れたつておとづれた。N子は數學、S子は論文「人生觀」だつた。その時敬子はS子がHから借りてゐる三木清の「人生論ノート」を次に借してくれるように賴んでゐるのを、貞夫は少し無理かなとは思ひながら、勉强しよう、本を讀もうとする敬子の氣持に感じて、その教養的で、終結において結局現實逃避のカラクリに、嫌氣をさした「人生論ノート」を彼女に貸したのだつた。

そしてその翌々日の今夜、相変らず「別莊」の寒々した六疊のはげたニス塗の机の上には、停電にそなへたカーバイトランプ、徹底的にすつた巻煙草の殘骸と、それにまみれた硫黄マッチの軸木が八分目程入つた陶器製の三角型の灰皿、それに、硫黄のマッチ箱、仰山たまつたプリントをはるべく今日大學からの帰りに買つて來た新しい「高級」と稱する三ヱ

ス物、講義の時しか開いた事のない五、六冊のノートが無意識的にシリーズに並び、貞夫はその前で唯一人二週間の後に迫った国士の試験に一種の圧迫を感じながら、鳥居から借りて来た國士のノートとにらめっこして手間のかゝる五六冊づつのプランク埋めに余念がなかつた。そこへ敏子が「人生論ノート」の分らなかつた語句、人名、哲学用語を丁寧に書いてもらひに来たのだつた。

貞夫はさつきから鉛筆書きの力強い字をみるよりも、眼を射る赤い罫線の線の一つ一つをヂツと見つめてゐた。感じ易い貞夫の心は、彼女の一途な真剣さ、その伸びようとする力に圧されて物がつまる様だつた。

今迄見なかつた、従つてまた感じなかつたあるものを、自分の現実の周囲として自分の全存在をもつて感ずる自分を知つた。「優秀だ！」のどまで上がつて来た感嘆をおさへながら、さりげない風に、だがたかぶる感情をしづめるべく努力しながら、口を切つた。

「ヒューマニズム。ヒューマニズムつてのはね、……ある人間的な、人間らしい感情、又は心情、気持といふか、そんなものを言ふんです。イズムでいふのは、日本語で主義とか教義とか訳されてゐるけれど、それはスヂミ子のある体系づけられた厳密な意味の「主義」ぢやあないんです。ヒューマニティ即ち、人間性、人間らしさといふのは何をいふんだらうか、つて事を考へて、それを自分の行動の指針にしようといふんですね。しかし、それはさつきもいつたように、さういふような心情とか、気持つてもんだから非常にたよりないものなんですよ。これだけだやあ現実に今どうしたらいゝかといふような具体的な方針は出てこないんだけどね。

しかしまあこの一般にいふヒューマニティを方へて見ると大体二つの意味があるんです」

貞夫は心のしつまりと、油かのりさうな口調を感じながら続けた。

「一つは人畜のみにくさとか、弱さつて言ふものを人間的なるが故にそのまゝ素直にみとめようといふんです。これは極端かも知らないけれど、人のものを盗んだり、誘惑にまけて堕落したりする人間の弱さですね。それをもみとめようつていふんですよ。要するに現実のありのまゝの人間の慾望をそのまゝ肯定しようつてんですね。

ある意味では、現実的なまた理想的な愛の立場ともいへますし」

大学の彼であれば、ここで具体的な現実の解釈法や、一般の常識的なあいまいな、現実、理想、愛情とかいふ言葉の説明を得意気にするだらうが、貞夫はここまで言つて口頭叶や丁から自分の青年会における表現の理窟つぽさを思ひ知らされてゐるのをおもひおこした。

学生に多い本でよんだ借りものの思想、そのシステムとにストリーをもつた自分の血肉化された思想ではなべて借りものゝバラバラな観念をペダンテイカリにふりまはす悪習、それは過渡期の学生として許されるかも知れない。貞夫自身も得意気にふりまわし、説をかき、そして又発展した。軍国体制下学生の一人として、一昨年大学に入つた当時の彼の意気を見せてやるんだといふシンプルな反撥感と、何かをやらねばならぬといふ高目的な責任感とに向け、それは新次本校から

ら離れた校方分校の大学生活にあきたらぬものを感じしめた。国についた文化講演のビラをめあてにさまよひ歩いた。そして偶然は、貞夫をしてカソリックと社研へ走らしめた。彼はいたるところで「過渡の山猿」ぶりを自覚せざるを得なかつた。中でも理学部での内田謙吉氏「唯物史観日本歴史」の講演とその後になされた学生間のディス、カツシヨンとは、貞夫の知識慾を最もかりたてる契機となつた。現代哲学辞典を全部暗記してやらうと意気まいたのも、六百圓の大金を母に黙つて持ち出して叱られたのもその頃だつた。ベーコンの「知は力なり」を感激深く感はつたのも、どうにかしてマテリアリスムスをくつがへしてやらうと意気まいたのも、三木清の「哲学入門」を七回よんでようやく分つたと泣き笑ひしたのもあの頃だつた。

「お前は何もしらないんだぞ」と罵る声と見えぬ鉄槌は、貞夫の頭をなぐりつけた。そして貞夫は神経質ながンバリを発揮した。だがこれの一破綻は言ひ得なかつた。そのような恵まれたコンデイシヨンにない青年会の大部分の人々には敬遠と離反あるのみだつた。そして彼等は、彼女等は貞夫とは同じく尊重さるべき人間であり、否それればかりでない、現実的には、父母が汗と血と油をもつて肉体を酷使されて得た尊い金で創られた人間だつた。グチをこぼしたら仕方がないとして来た父母、もし自分がそれでは駄目だと言つたなら、この人にきらはれる事をすると損やでしといふ母。貞夫のとつた態度は、苦しい無意識さ、本能さをもつて青年会に逢くだのだつたが、今にして思へば、こゝに自分の伸びゆく美しさ、肉体化されたわるものを見出した。そして多くの人のひかみ根性だ、とはれても「ウンさうだ、ヒがミ根性だとゝその非化学性をあしらふこの得難い素地を尊らしくも感ずるのだつた。

ペダンテイツクな表現は、自己の断片的な観念、又は単なる表象のよせあつめを力モフラージュする最も都合のいゝ方法の一つだつた。しかし正直な素直な人間には判かぬ方法でもあつた。

貞夫は話してゐる敏子が、自己卑下と羞恥心をもつ若き女性であり、なほ自分を人間を真剣に考へようとしてゐる働く女性である事に、責任を感じ、わざと人なつこいようなしかし一抹の不自然さを感じながら彼女に頭をむけて尋ねた。

「分るぞ」

「えゝ」

尋くうなづいた敏子は何一つ聞きもらすまいとして全神経を貞夫の声と赤い罫紙に集中してゐる様がうかがはれた。

「もう一つはね、たゞそのような自然のありのまゝの人間を認めるのと二寸方へると正反対のやうに聞えるかも知れないけど、現実のあるがまゝの人間から、更に進んでどのような人間にならうか、つていふ人間の理想をも言ふんです。そこでキケロとかニーチエ、セキヤベリ、フロイド、マルクス等、その他多くの人々が、人間が、犬や猫のような動物からどんな点で区別されるか、といふような事をしつて、その違つた点を意識して更にのばし発展させようとしたわけなんです。

例へば今から二千年程前のローマの哲学者キチワつて人は文学や、歴史などの本をよんで、それをよく理解し、かみこ

はせるだけの教養をもった人間ですね、言葉をかえて言へば動物的な本能を教養によって清められ、高められた人格のある人間それを、理想の人間としたわけなんです。

また これと一寸似てるんだけど、感情と対立させて、一般によくいふ理性ですね、この理性の有無によって、人間を動物から区別しようとしたり、又動物はいろ〳〵なものとか、道具をつくったり、それを使用したりする事は出来ないけれども、人間はそれをする事が出来る。いはゆる「道具を作る人間」ですね、これが、人間のえらい所だとしたのです。この外、神を信仰し得る事とか、人間つてのは精神病にかかってるんだとか、色々な見方があるわけですね、結局さういふような人間性は、それ〴〵の時代とか、環境とかによって違ふ点は違ふんだけれど、どれもみな幾分かづつでも今の僕達にはもつてるわけですね、だから敬子さんや僕が、今どこに人間の尊さをもとめて、それを伸ばしてゆかうかといふやうな場合、今の社会はどんな風になつて居つて、どのやうな方向に流れてるかとか、家庭や工場や学校の状態とか、今までやつて来た事、考へた事、などの結果として自分なりにつくるんですね。本をよんで、そのまゝあてはめようとしたつて駄目ですよ、参考にするのは必要なんだけど。

ここまで良夫がいひ切った時、五の燭光がパツと消えた。良夫は手さぐりして灰皿の横にあるはづのマツチ箱をとり、平たい二本分の硫黄マツチに火をつけた。カーバイトランプの栓をゆるめて火口にもつてゆくとパツと青白い火が勢よくふき出した。敬子の顔は暗い後の壁と黒い事務服とパーマネントによって、気味悪いように白く浮き出され、そしてその真剣さに、すごみをあたへたように見えた。良夫は赤襟巻のはげたシガレツト・ケースから手まきを一本とりだし、カーバイトランプで火をつけた。そして気分を落ちつけるように一息大きくすつて話をつづけた。

「話がはづれるようなんだけど、どんな本をよんでも、それを自分に結びつけて、とり入れるところをみつけなければなんにもならないと思ふんです。だからこんな事もいふんだけど、そしたら敬子さんなら敬子さんがつくられて来た社会とか環境の動きを全部知らなければ出来ないかといふと、そんな事はないわけですね。二の間、青年会の丁君から聞いたんだけど、丁君の勤めてる銀行で、支店長代理が越冬資金の分配で変な事をやつたので彼がつゝこんで行つたといふんです。そしたら前に座つてた早稲田を出た青年が、支店長の御気嫌をとるようにこういつたんです「君はそんな偉さうな事をいふけれど、どんな人生観をもつてるんだ。」とね、丁君は例のズケ〳〵な調子で「あんたに何も用はない、人生観なんて難かしい事は分らないよ、要するに食ふ為に生きてるんだ」と答へたさうです。たしかにさうだと思ふんですよ。

その青年の、学校出の、又商業があるといふテラとあやまつた知りかたはお話にならないけれど、丁君が無意識に言つた「生きる為に」といふ言葉は非常に意味があると思ふんです。二の着たり、喰べたり、住んだりする事は、如何にも下等な人間のように思はれてるけれど、どんな偉さうな事を言ひ精神の立派さをといてるんでも、裸でかすみを喰つてホリ出されてるわけぢやないんですからね・又意識してるなくても外から必然に見ると、どんな方法でそれらを手に入れ、

使つてるかによつて、その人間がきまつてるんですからね」

デイスカッシヨンに油が乗つた時する早口と、熱くなる眼の間を瞬間意識しながら、手まきの煙草を人差指と薬指とで握るようにはさんだ右手を口へもつていつた。

「人間とはどんなものだとか、人生観なんてものは、口ではいはなくても、夫々みなもつてるわけですね、生き方をしらなくては、死んでしまひますよ、しかしそれは意識してより高く伸ばさうとする事は、今のみにくい時代に迫む若い僕達として必要な事ですね。

そして僕は人間を知るために、そして自分をつくるために さつきも言つたように、自分がどのような方法で衣食住を手に入れ、使つてきたかを先ず知らなければならないと思ふんです。そして更に近な一歩前進した在り方を意識しながら行動して見て、そのあやまつてゐた所を直し、更に前進する。自分なくて、机の前や、寝床の中だけで、自分の殻の中でいくら考へても、堂々まはりするだけですよ、自分といふ生きてゐる人間を外へなげだして、大きな眼でみなけりや」

良夫はドイツ・イデオロギーの人間としての歴史的な一大前提を再確認しながら

「自分がその誤りを胃してゐるんだぜ」

と、自分自身に言ひ聞かせるのだつた。

消えた手まきの煙草にもう一度火をつけて、赤い罫紙の関聯させて説明し得る字句をさがしたら、ヒユーマニズムが世界史的な意義を持つ様になつたルネツサンスの事や、人間の慾望は肯定せねばならぬが、その慾望が現実の具体的なあら

ばれ方において進歩的にも、反動的にもなる事、またそれと関聯して学校に行かない彼女に、知らないといふ事を知る事は、発展の第一歩であり、過剰知識や飾りの教養は、皿と肉とを分析したまゝ一方的になつたり、二上リズムに落ちる事、そして現代のヒユーマニズムがまだ知識的に至くでない自然的、原始的なプロレタリヤの中に驚異一致を見ようといふ動きがある事、更にマルキシズムの立場からは、此の時代になふものは我々の階級だと……感情的な、しかし現在ではそれを正しい認識の結果としての感情をおしすゝめようとしてゐる。

良夫は弱の熱さを感じながら、赤い罫紙を、裏のガラス戸を、うなづく敬子を、次の言葉を追ふようにみつめ、ある時は両手を半ばあけ、にぎりふり、高ぶりゆく自分をどうする事も出来なかつた。否、むしろその興奮、弱もしい彼女の美しい伸びゆく力に感じた、得がたい喜悦をもちつづけようとさへした。

彼はいつも真剣さと表裏さに敬意を感じた。それは二年間の軍隊生活で、鈍くさいそして気の弱い自分を、不得手な訓練から真剣と真面目さに驚嘆させた結果として生れたのだつた。

なにごとするにも上級生又模範を示さねばならぬ下級生への緊張ねと、他力に自信のない自己卑下がつきまとつてゐた生活、自分の意気地なさに、鍛えるのだとスキー場にかけ上り唯一人自分の弱さを泣き、又眠下の並列した生徒館どどす黒い誘惑魂を見ては、弱さとの闘ひを誓ふのだつた。

「要するに誠意の問題だ」当時の彼にはすべてが誠意に

よつて、爽験さによつて説明せられ、又それなるが故に、感じた。それは日頃の真面目さを示して憐れみを求めようとする自分をも見出したからなのだ。

時代は変つた。そして紅研は動く歴史と社会に生きる人間、自らの労働を切り売りして生きねばならぬ自分等の階級を知らしめ、良友鳥居は社会の醜い人間の裏面と、そこに見られる人間の素直さとの体験を以て、再出発しつゝある盲目の貞夫に杖を與へてくれた。

それは貞夫に抽象的な誠意、真剣、真面目さは、時としては客観的に見て虚偽の題目でもあり得る事をしみこませてくれた。人間的心情は、それが如何に昇華された美しさをもつてゐても、冷酷な現実は容赦せずたゝきつけるのだつた。貞夫のすべてを認め、肯定したいといふ気弱さは、貞夫をして煮え切らぬ八方美人的な態度をとらしめた。又それなるが故に、首のまはらぬ様になつた若い自分の原因は、誠意の抽象性を無意識に固執してゐるからだと知つたのだつた。しかし貞夫の心は傷めつけられた誠意、真剣さの一方的になるのを忌避しながら、やはり歴史的、社会的な正しい認識の結果としての具体的な仕事への真剣さ、誠意さは、やはり捨て難い愛着を感じてゐた。

真面目な純の人々に「宗教は阿片だ」などといひ得ないで神を信じる感情的なつながりをみとめたいと思ふのも、又それなるが故にだまされ易い彼等に、主観的な欺瞞を注意したいとも思ふのだつた。

貞夫は単なる自己満足か、虚栄に対する対抗かとも疑ひ乍らも矢張り前に居る敬子のシンプルであるが、眼ざめかけた真剣な、素直な、伸びようと努力する姿を、崇高なものとして見たかつた。

あやふやな所は辞典をひつぱり出して、自分の無力をみとめながら、一通り説明を終へた。敬子は終始だまつてうなづきながら聞いてゐた。貞夫が我にかへつて冷静に敬子を見た時、彼女の目にはキラツと光る何ものかを認めた。その真剣さ、全神経をあつめて聞き入る姿。貞夫ははじめて現実に見る次の時代の美しい姿を見出す気持だつた。

「さあ終つた。火の気のないのにすみませんでした。一寸火をいこして、文化的にやらうかなあ」

細くなつたカーバイトランプの栓をゆるめながら、いつか青年会でザツクバランは大切だけど、物のそなはつた文化もいゝなあ、といつて、この「別荘」をひねくつて大笑ひした事を思ひ出してこういつた。彼女もその「文化的」といふ言葉に口元をほころばせて白い歯をみせて遠慮深さうに言つた。

「あのもう帰りますわ」

「いゝぢやないですか、ゆつくりしなさいよ、それとも用事があるの」

「いゝえ」

貞夫はこの機会にもつとくはしく彼女の身の上を聞きたいと思ひ、もつと力着けてやらねば、とも思つたのだつた。そして新聞紙をまるめてランプで火を付けて火鉢の中で炭をいこすのだつた。貞夫はもえ上る新聞紙の黄色い火をみつめ、あぐらをかいてしびれた足をさすりながらたづねた。

「敬子さんはどこへ働きに行つてるの」

「敬子さんはどこへ働きに行つてるの」

つとめて何気なさそうに訊ねた。

「くび飾りを作つてゐる工場ですの」

彼女は何の恥じらひもなくすらりと言ひ切つた。意識的か、無意識的か、卑屈を認めぬ彼女にうれしさを感じながら貞夫は続けた。

「くび飾りつてガラス玉で作つたやつですか。」

「えゝ」

「どうして作るんです」

「アノーどう言つたらいゝかなあ。石油ランプの上でガラス棒をあたゝめて……なんしか三ケ月しないとうまくなれないんです。私丁度入つてから三ケ月でようやく出来る様になつたんです」

両手でかつこうをとりながら、言ひ得ない恥かしさからか赤くなつて困つたような顔付だつた。

「フーン、また何時か工場を見せて下さいよ」

「えゝどうぞ」

「ところで君姉妹何人あるの」

甚だ失礼な直接的なたづね方だつたが彼女の人間をつくる環境の最大のファクターである家庭を貞夫なりの意味において知りたかつた。

彼女の言ふ所によると二度も焼け出され、父は二度目の戦災の時大火傷が原因でなくなり、母は五歳の一番下の妹の守と家族五人の食糧の用意にいそがしく働いてゐるのは彼女と次の十六歳になる製靴工場に働く妹のみで、他の一人は十四歳になつた六年生の妹だつた。

貞夫はそれ以上この事について聞く気力がなかつた。どんな逆境にも強く乗り切り、嬉々として働く人間の姿、貞夫がなりたいとしてゐる強い人間の姿を眼の前に見るような気持だつた。

そして彼女は言つた。

「でも妹だけは女学校に入れてやりたいと思ひますの」

貞夫はこみ上げるものを感じて自分のセンチメンタルを「そつくさつ」と心の中で打ち消した。そして、そこにまだ彼女を苦しめる卑下が含まれてゐるのではないかと案じながら言つた。

「それやいゝなあ、実際優秀だよ、勿論ね、学校へ行つた方が勉強する條件がいゝですね、僕自身も大学へ入つてつくづくそれを感じさせられましたよ。でもそれのみが、人間の値打を決定するんじやなくて、その得た知識をどの様に使用し、又行動するかが問題なのですね。

その意味から学校へ行つたものに比べて、ゆかぬ自分を卑下したりする事はないと思ひます。勿論羨ましいと思ふ事もあるだらうけど、それは君の場合、家庭の事情であり、また社会の大きな矛盾の一つなんですね。君の意志ではないですよ。そして又、今君が本を讀もうとしてゐる。そして自分を、社会をかえてゆこうとしてゐる。その知つた事を自分の生活に結びつけてゆけばきつと強くなると思ふんです。これからは、君は君の立場から、僕は僕の立場から、色々な事を話し合つて行こうや、僕にもいゝ勉強になるんです。是非お願ひしますよ。」

敬子は目を輝かしてうなづいた。

突然電燈がついた。白い気味の悪さをもつたカーバイトランプの白くなつた火と彼女のうれしい決意とで、貞夫には、殺風景な雑然とした部屋に今まで知らなかつた明るさを感じたのだつた。

白い灰をふいてゐる炭を火箸でいじりながら貞夫は理窟つぽくなつた話題に気がつき、自分の好奇心も手傳つて恋愛を引き出さうとした。

しかし彼女はやはり平凡な女性だつた。また平凡なるが故にその一般性から、盛り上る大きな新しい力を高く評價したかつた。

彼女等三人のグループの中でどうやら彼女はS子と共に青年会の同一人物が好きらしかつた。

「Hさ」

貞夫は出来るならばどうかしてやりたいと顔をほころばせて尋ねた。

「うゝえ」

彼女は人なつこさうに首を振つた。

「Kさ」

「うゝん」

「Mさ」

やはり彼女は貞夫の言葉の全てを否定しようといふ風に、間の彼を追つて否定した。

貞夫は黙つた。

そして自分の苦いリーベの経験からくる恐ろしさを想ふのだつた。

年上のH子を盲目的に愛した初恋、それは彼女の熱つこさと、テクニックにずるく入りこむ自分の弱さに身振ひして一歩手前でキッパリと手を切つたのだつた。あの時の打撃は、初めての異性なるが故にまた大きかつた。

もう手を出さぬと誓つた自分、そしてまた熱をあげたダンスが再び機会を、意じ弱い自分にあたへた。しかし躊躇した。以前の自分であつてはならない。考へよう、冷静に、客観的にと。そして結局F子を愛してゐるときめた。

しかし他方彼の思想の変遷は好きだと断定したF子への愛情を徐々に奪ひ、つひには単なる友情としてしか彼にのこらぬようになつた。自分で好きだと考へ、また自分で去りゆく愛情を肯定した貞夫は、自分のリーベへの変り易さに呆然とするのだつた。

社会は発展する。そして人間も発展する。それは正しいと認めながらも対象をかへたり、リーベへの適用は彼には耐へ難かつた。又それは誤りでもあつた。

しかしリーベは自信をなくさしめる。と、思はざるを得なかつた。人に話す時は

「勿論俺は若いんだ、リーベもするよ」

といひながら貞夫の内心はリーベから逃げて行つた。

だからこそその後のF子やM子との交際は、その真実にうたれ乍らも最初から手紙のみで、ディスカッションのやりとりだつたのである。

貞夫は一途な敬子の気持を損ひたくはなかつた。しかし自分のにがい経験から彼女だけは、センチメンタル、ロマンスの悲劇を味あはせたくもなかつた。

そして彼女は静かに言つた、

「私が好きだなんて言つたら、その人の気を悪くしないかと思つて、よういひませんの」

との言葉から、関係のない自分にうち明けた後悔がデリケートな女心を苦しめるのではないかと恐れた。そしてAだと直観した。

「ウーン」

次の人を考へてゐるように見せかけて貞夫は躊躇した。

そして分らぬように首をかしげていつた。

「分らんなあ、まあ考へておこう。でもね、僕が思ふのには、恋愛なんてものは、決して、今迄の恋愛小説や映画のように、甘つたるいものぢやないんですよ。でも互に異性を理解し合ふとか、人間を美しくしてゆくとか、いふのも確かですね。

大いにひつこんでないでやるべきですね。でも自分勝手で上つてしまつて、頭の中で恋愛を恋愛してるつてのもどうかと思ふんです。君ももう青年会へ入つて三ケ月もなるんだから、男つてどんなものか分つたでせう」

貞夫は如何にも自分が異性を知つてゐるかのようにいつたのを「しまつた」と思ひながらたづねた。

「いゝえ、一寸も分らないんですもの」

貞夫は彼女のとんでもないといふような様子をみて、やつぱり青年会に来ても小さく閉じこもつてゐたんだなあと、少し拍子抜けした気持だつた。

「さうかなあ、じやあ僕モンパッサンつていふフランスの有名な作家の書いた『女の一生』つて小説あるから、あれをよんだらどうかなあ、真面目に真剣に考へてよんで悪いと思ふんだけど」

「えゝ、是非借して下さい。人生論と交互によみますから。どうも人生論はむつかしくて頭がいたくなりますの」

純真な伸びようとする女性にナチュラリズムは、きついかなと思ひながらも、いややはり読むべきだと、タンスの横に積まれた本の中から世界文学全集をさがし出して敬子に渡した。

「是非読んでから感想をしらせて下さいよ」

ともう一度念をおして貞夫はその友情を確かめた。

間もなく敬子は遅くなるからといつて礼を述べて帰つて行つた。

貞夫は最後の一本をケースから抜き取つて小さくなつた炭火におしつけた。火のついた手まきをすひながら、心地よい今の感情の出所をさぐるべく今夜の出来事を反芻してみるのだつた。

まず客観的に見よう。誰も見てゐるもののない六畳の部屋で、二十四と十九になつた男女が話し込んでゐる。知らぬものが見れば、危いとでもいふだらう。所でこの二人の間にはセックス・インスティンクトが働いてゐなかつたか。ウン、俺は否定しない。だがフロイドの精神分析ぢやないんだから一概に俺はオミット出来る。

敬子は平凡な女だ。他に負けないぞといふ単なる負け嫌ひ、それに虚栄、自己満足が含まれてゐないとはいへない。だが人間つてすべてさうなんだ。ピュリタンなんて生きてない。そして人間は統一されたものであつて一面的ぢやない。その意味からやり方一つによつて彼女の逆境にあり乍らも、真剣

伸びようと努力する生産的な人間、醜い人間、美しい人間が出来上る。働きながら本をよむつらさは俺も知つてゐる。彼女のもつ自己卑下、極度の自己反省癖は、俺と幾分つながりをもつ。その打開法は、やはり自分から飛び出す事であり、実力を作る事だ。八方美人の煩悶は、今の俺にはどうやら可解がつきさうだ。西田哲学の「あれでもない、これでもないしとか、ヘーゲルの「あれもこれも」の弁証法は真平だ。その意味からキエルゴールの「あれか、これか」ば同意し得るものがある。しかしそれも、実証的な体験が限られてゐるからどんどんあたつてゆくんだな。美しいなくて実にあいまいな言ひ方だけど、本当にリアリスティックな美は、俺にはなくて、今はシンズルでも、真剣に努力して発展してゆく姿だなあ、といつて見下げるための、見栄をはるための足搔は醜持ちならぬ。しかし、どちらもいゝ刺戟になるな、結局相互作用で前者に根源性をおくとして解決するか、その意味からやはり彼女の人間は美しい。

やるぜ、俺も美しくなろう。じやあ今どうすりやいゝんだ。黙つて瞪工のブラツク埋めをやりやあいゝんだ。さうだ……

貞夫は落着いた気持でまたはげた二ス塗の机に向つて二ラメツコを始めた。

表のコンクリーで寒そうな下駄の音が響いてゐる。

―以上―

無

鬼丸　貞幸

留仕事して　つかれた身に
もう何もする気はない
すぐだ小春日和の空
背にうける心地よい陽の光
しんみりと
甘い淋しい思ひ出　あの事この事
くすぐる様に　胸をかすめ去る
私は幸福なのかしら……呟やく
時に委して
友の情に甘えて
自分は
何一つしようとしないではないか
只こんなことを考へながら
つかれた身は縁に横たへてゐる。

海

朝の海よ
優しく懐かしい今朝の海よ
おゝ
　お前は幸福者だ
すべての海浪を
希望の衣裳に着せ変へる
春の陽の　輝かしき光の様に
あゝ
　お前は今朝も又砂の上に来て
　踊る
無限への生を謳ふ
薔薇色の
燃える様な
神の霊場の歓響
繁栄の喜び
　あゝ
　お前の微笑が私を沸立たゝせる
　　生!!　生!!
夜の海よ
無慈悲な恐怖の夜の海よ

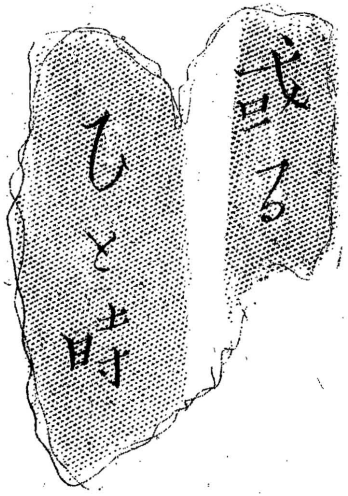
工藤目男

おゝ
　お前は薄情者だ
凄なき氷魂の様に
夏の日の温り霧の様に
あゝ
　お前は昨夜も亦若い女の生命
　を奪つた
無限の生を犠牲にえとした
暗黒の
冷たい
奈落の底から吹く風
地獄の息吹
　あゝ
　お前の微笑が私をさそふ
　　死!!　死!!

駅頭・雑感

寝てゐる　寝てゐる　寝てゐる
立つてゐられなくなつた時
人はしやがんだ
しやがんでゐられなくなつた時
人は大地に身を横たへる
それば　もはや
大地にすべてを帰する他に
如何なる手だても失つた姿だ
人生の旅路の果ての姿
駅の構内に　地下道に　到る所
家と食を失つた人が　哀れな姿で
寝てゐる　寝てゐる　寝てゐる
寝るより他に方法は無いだらうか
叫んでゐる　わめいてゐる
　　　　　　　　　　　嘆つてゐる
上を向いて口をあけて
　眼鏡を落しさうにしながら
男が　女が
老人が　若者が
大きなリユツクをかついだ闇屋が
立派な洋服の御士が
さも愛しさうに鞄を抱えてゐる学生が
駅頭で　地下道で、車内で
その生活の大部分を
かうして乗物と駅で浪費しながら
哀れな姿で　叫んでゐる　わめい
　　てゐる　嘆つてゐる
あゝ人生路難と言ふ言葉が
　とつてあつたのを思ひ出す

或るひと時



日生　光

丁君が私の部屋へ入つて来たのは黄昏時でした。それ迄私は暖に煽られてゐる様な圧迫を感じ、時々ねむつては譯の分らない夢に襲はれてゐたのです。ひそかに私の心を嬲めて呉れたあの温床もふち壊されて、終日怒ろしい迄に私を苦しめた心の痛は、も早私の肉体では支へきれない程の大きさにまで私を占有して了つてゐました。時々一種の発作のやうな非常な悲しみと怒りとが、私を襲ひ、私の眼には涙さへ考んで来るのでした。私は能楽した人のやうに身悶えして体を動揺させ、悩ましい無限の孤獨より逃れ去ることばかりに専心してゐました。さうしてこの人間的な渇望に何らかの解決を與へて呉れる人を、私は心ひそかに待ちあぐんでゐた様でした。

「どうだ、いやに顔色が悪いんぢやないか」

丁君のその言葉は、一寸聞けば横柄さうでありましたが、私の憂鬱を晴らすのに可成りの効果をもたらしたのです。彼は幾多の努力を拂ひ、あらゆる方法を盡して金を集めてゐる様でした。さうしてこの金と物事にこだはらない聞け放れた心とが彼を彼自身より以上の社会的地位をから得させたのでした。しかし彼には若人の特長は失はれてはゐませんでした。彼は感激性に富んで居り空想をたくましくする一方体に似合はず涙もろくもありました。さうして悲嘆のどん底へつき落されゝば、泣きながらでも立ち上り、これを打開して行くだけの勇気と熾神力とを持ち合はせてゐる創造的な青年なのです。私は彼の外交的な手腕よりもむしろ彼の人間的な暖かみに強く引かれてゐたのです。

「やあよく来て呉れたね」

私は固くなつてゐる体を起して、寝床の上に坐りましたが物につかれた様に両手はわなゝくと震え始めた。

を走つて通るのでした。私が寝床の上の座布團を彼に勧めると、

「いやいゝんだく、君、寝てゐたまへ」

と彼は若旦のやうな大声を出したので、私は閉口にでもかゝつた様に頭にがんと言ふ響を感じた位でした。

「まだ一週間ばかりしかならんのに大分痩せたぢやないか人間は氣を使ふことが一番いかん」

彼の言葉は率直でした。彼は二言三言能け様にしやべりましたが私にとつて感銘を與へる様なことはありませんでした。私の頭の中はそんな機械的な事よりも、もつと重大な事で満たされてゐたのでした。私は冷い手で脈をなぜながら一人ごとのやうにしやべり出しました。

「僕はなんて弱い人間なんだらうか。丁君、僕は世界中の人間の中で一番みじめな人間の様に思はれてならないんだ。僕は人類の敗者だ、生きて行く希望も力も奪ひ取られた一つの抜け殻だ。あゝ僕は一この世から逃げて了ひたい」

「おい〇君、君は何てことを言ひ出すんだ。両親もあり、兄弟もあり、何の心配もなく学校へやつてもらつてるんぢやないか、君がそんな事を言ふと罰があたるぞ、元氣を出せ、元氣を、さあそんな事をして居ちや風邪を引くぢやないか、ね、床へ入るんだ」

丁君は立ち上つて私を寝床へ入れて呉れたのでした。私は自分の言はうとすることがまるで纒められない調子で、一寸泣きたいやうな氣さへしましたが、同時に又痛はしい程胸を圧しつけられました。その中に黄昏の色も段々なくなつて、太陽は靜かに死んで行きました。庭の黄葉は時の移るに従つて落ちて行く日の光を一身に反射して悲しさうに木々の姿を浮はせてゐます。靜寂と悲哀の情があたりを包み、私達を無意識に時の移る力によつて、今日より明日へとおし流して行くのです。丁君は心を奪はれでもした様に目を大きく見開いて、私を支配してゐる、何か打ち勝ち難い感情を見て取つたやうで、如何にして私の衝動をやわげてよいか、途方に暮れてゐるやうに思はれたのでした。私は「人間は何の為に生きるのだ」と言ひ、言ひ古された疑問が、私達の全一先が繰返して来、又将来私達自身も又子孫達も疑ふであらう解き難い疑問を丁君にあびせかけました。私は口を噤んで、丁君に挑む様にその返答を待つてゐました。私は敗北を続けてゐる丁君の為を、一種の好奇心と困惑してゐる彼の態度とにある種の喜びとを感じてでもゐる様に下から覗き込んでゐました。

「人生の目的か、そんなもんあるもんか」

彼はぶつきら棒にこう言つて、私を眺めましたが、彼の語調には力がありました。

「おや人間は何故生きてゐられるんだ、意義もない人生によくも果しさうに生きて行けるもんだ」

「実際人間つてつまらんもんだよ、小さいことにくよくくするし、欲には限りがないし、僕もおつとろへてゐると涙が分らなくなつて了ふんだ。然らろへたつて分らくから、もう考へようともしないで、今では無意識的に息をしてゐるだけだよ、ハハハ……。だかね、人間が生きて行けるのは、愛の力がある為だよ、愛が生活の推進力なんだ。君もしよつ中言つてゐたではないか」

「あゝさうだつたね、君とよく話した事があつたつけ、だ

が僕には、僕には……」

「君は大部神経を務らせてゐるよ。余り餘計な事をしやべらないで安静にしてゐるんだね」

「しかし君病気は何から起るんだ」

「僕は医者なやあるまいし、そんな事は分るもんか、今日君大分愁に浮かされてゐるよ。そんな時には何も云へないんだよ、無だ、無の境地を開拓するんだ。」

「あゝ僕には無になんかなれるもんか、僕は、僕は、今から話をしやう、T君暫らく聞いて呉れさうして解決を与へて呉れ、僕には之以上分らないんだ。聞きづらいだらうがT君僕の親愛なる友人よ」

こう言つて了ふなり木枕の上に伏せて了ひました。不意に私はふるくふるへました。名状し難い悲哀の念が私の頭をかすめました。私はこれだけのことを言ふのに体内の全智全能をふりしぼり固い決心と言ふよりも、それを超越した何ともなく恐ろしいほど醜悪な感情が、かう言はせたのでした。太陽は沈みましたが、まん圓い月が刻々に明るく冴えつゝありました。私の部屋の電気スタンドはにぶい光をなげかけて煙草の煙で包まれてゐるT君の横顔を静かに照らしてゐました。

「君も知つてゐるだらう、あのS子さんを、僕の生活にはS子さんが必要なんだ。それを段々強く悟る様になつて来たのだ。あの美しい淑やかな彼女こそ、僕の進路に於ける大きな光明であつたのだ。僕は生きがひを感じてゐた。今迄全生活を形づくつてゐたのも大部分は彼女であつたのだ。彼女には女性特有の自惚れを少しも僕には見せなかつた。自分の才能を高くは評価しなかつた。僕はどれだけ夢に空中の楼閣を描いたことだらう。だが僕達のリーベには、根本的な悲劇性を含んでゐたことは君も御了知の通りだ。彼女が何故あんなに早くから婚約をしたくかな、勿論両親が居なかつた為だけど、さう考へれば、彼女も可愛相なんだあ、何て皮肉なる運命のいたずらよ。僕にはあの八月十五日の晩の出来事、その後だらくと蒸つた衣生的な事件、僕は覚えてゐる、はつきりと、今でも向きあつて坐つてゐたあの時の事が」

私は興奮してゐました。さうして今迄冷たかつた顔に再び血の気のよみがへるのを感じました。私は意若しくもあり、悲しくもあり、又淋しくもあつたのです。S子は私より二つ年下の優しく淑やかな女性でした。私が始めて彼女を知つたのは、彼女が女学校の五年生の時でしたから、今から三年以上も前だつたんです。オカツパの頭、均整のとれた姿形、魅惑的な美くしい眼、それらは物心がつき肉体内部の衝動を覚える様になつた私を、ひどく引きつけるに充分でした。私がぼんやりと彼女の姿を思ひ出してゐる時に、母がお茶とリンゴを持つて来て呉れました。

「本当にTさん、よく来てくれましたね、この子たら一日中話相手がほしいやうですけど、こちらもいろ／＼用事があつて、つい一人きりにし勝ちなんです。今日はあなたにおいそぎでなかつたら、ゆつくりと話の相手になつてやつて下さい。この子はねえ、まるつきり気が弱いもんですから、病気にのまれて了ふんですよ。さあHさん、そんな変な恰好をしないで上を向くなり、横を向くなり、木枕の上に頭をのせなさいよ」

母はちよつと私の頭へ手をやつて部屋から出て行きました。T君は私の体を心配して呉れて止めておくやうに勧めて呉れるのですが、それが却つて私の心に淋しくこたへるのでした。私の胸中には、何とも言へない、それは鋭い痛さとでも言ふやうな気持が湧き起り、私の記憶の底深く揺れてゐるS子の思ひ出が、暗闇の中の灯の様に、はつきりと蘇つて来るのでした。彼女は落着いてゐましたが、いつもの爛々とした眼には光が失はれて机の上に垂れ、額には血の気がなく不安さうでした。

「S子さん、僕は今日あなたに重大な宣言をせねばなりません。丁度一年前の今日は、国家的な大敗北をした日でした。あの時ばかりは中隊長と一緒に泣いて了ひました。今でもその時のことはありありと浮んで来ます。あの戦争は勝つてゐても日本国民は幸福になれたかどうかは疑はしいですがね、敗けてかへつて人間味のある生活が出来るのは不幸中の幸です。それから一年。今日のこの日を迎へていろいろな事が思ひ出され、僕の胸は熱くなります。それに今日は僕にとつて個人的な敗北の日でもあるのです。今迄あなたが、僕のやうなものに真心を以つて交際して下さつたことを厚く感謝致します。陰に陽にあなたが慰め励まして下さつたことは、どれだけ僕を元気づけて呉れたか知れませんでした。僕がこの様に人と肩をならべてついて来られたのも一重にあなたが居られたが為に外なりません。そのあなたを僕は一生失ひたくはありません。だが——時の流れは僕達だけを残して呉れません。S子さん、僕はあなたにどれだけ御迷惑をかけたことでせう。どうかお許し下さい。僕は今迄あなたを束縛してゐたかも知れませんが、これからは僕などにとらはれずに自分の信ずるまゝに進んで下さい。僕はあなたに負けたのです。変な言ひ方ですけど、僕は降伏したのです。言ひたい事が沢山あるんですけど、もう頭の中でごつたがへつて……」

私は冷静をよそほうと努めましたが、それでも心臓は鼓動し、脚は震へてゐました。私はすつかり観念してゐる彼女の方へ眼をやりましたが、はつきりと彼女の顔を見る事が出来ませんでした。私には如何なる方法を以てしても悲しみと興奮と嫌悪の情を抑制することが出来なかつたのでした。

浮べる雲の影はいつしか消えて、流石に長い夏の日もすつかり暮れてゐました。星が一つ二つ輝き出る頃には、大空は青く澄み、夕風は畳面を渡つて私達に涼しく吹きつけて来て軒の風鈴も清らかになつてゐるのでした。それ迄彼女は一言も口に出さず、気の抜けた様な様子をして居ました。彼女の引き緊まつた口、蒼ざめた顔の色、半ば閉ぢられたやうな美しい目は、過去の思ひ出を追ひ拂はうとしてゐるやうに思はれました。彼女は自分の現在の立場と進むべき道とを秤にかけて、いづれが正しいかと判断し兼ね、さも堪へられないかの様に首を垂れました。

「私がなぜ勝ちましたの」

と静かに言ひました。その日の彼女にはいつもの明朗性と晴やかな態度とはちつとも見受けられませんでした。

「そりやあなたが勝たれなかつたかどうかは知りませんが、兎も角僕は負けたのです、第三者を通して、僕は人生の敗北を喫しました。だがあなたにはあなたのなすべき義務があるのです。今あなたを失ふことは、僕にとつてどれだけの打撃

を與へるかは知れませんが、いつまでもそんな勝手なことばかりは言つてゐられません。時は僕達に容赦なく流れて行き運命の波は僕達を揺ります。いつ迄もくよくよして行けたなら、どれだけ幸福でせう。だが世の中つて思ふ様にはして呉れません。これから僕は僕として生きる道を考へる積りです。あの大宇宙を眺めてみると、僕一人の存在は大洋の一原子位に過ぎないんですもの、ねえ、S子さん、氣の悪くする様なことも言ひましたが、共に強く生きようではありませんか。さうして今後は今までより一層に親密の度を加へて互に助け合つてやつて行きませう」

　これが私の心からなる悔悟の氣持でありました。

　その時、人待ち顔に雨戸を叩いた冷やかな晩秋の風が私を我に歸したのでした。T君は矢張り私の枕もとで煙草をふかしてゐました。私はお茶をぐつと飲んでから

「T君、前途に横たはる苦難の道と孤独の荒原は覚悟してゐたが、まさかこんなにたゝるとは思はなかつたよ」

　私は運命の皇座に冑を脱いであきらめるやうに微笑をさへたゝへてかう言ひました。

「なあに、そんな位でくよくよしてゐちや世の中つて渡つて行けないさ、君らはまだ学生だから、そんな悠長な事を言つてゐられるけど、実際社会にほうり出されたら、勝手が違ふので、まごついて了ふや。僕も近頃になつて、やつとなれて来たがね、要するに君達は所謂プラトニツクなやつをやつた訳だね。勿論君の考は正しいんだよ。だがさ、惜しいことには現実性が欠けてゐたんだ。四を二で割つて二になる様な世の中だつたら、苦労するものなんかありやしない。そこには色々のフアクターが入つて来て、うまく割り切れないのが現実だ。君のリーベにしたつて、始めから可能性のない人にぶつかるもんぢやないよ。もつと理想と現実とを折衷して行かんと、何時でも頭を打たされるよ」

「しかし君、リーベつてそんな性質のもんぢやないよ。土壇場になつてから環境やバウンダリーコンデイシヨンが大きく考んで来るんだからね。」

「頭を打たれてから氣の付くのは、当り前ぢやないか。それを事前に洞察するだけの力がほしいね」

「さあ、さうだらうか。あの時は二人以外は何も頭の中になかつたんだからなあ」

「それが無批判といふやつだよ」

「だがT君、それを一概に無批判だと言つて了ふのは、酷に過ぎないか」

「いや、君がS子さんに降伏を宣言したのは賞讃に値するんだ。流石に君だけある。いよいよ君も僕の感化を受けて来たね。ハハ、……。兎も角、S子さんとは余り深入りしてもらひたくなかつたと思ふだけだよ。」

「僕にはあの時の楽しみが大きかつただけに後のこたへ方がひどい様に思はれるんだ」

「さうだらう。そりやS子さんはよい娘だよ。だが世の中は廣いんだぜ。S子さんのやうな人は、きつと外にもあるよ。女一人なんかにくよくよするのは、馬鹿らしいぢやないか。ハハ、……」

「T君、僕は真剣なんだ。僕はあの時、至極く冷静なつもりで、大決心をしてS子さんから、遠ざからうとしたんだが

ね、その氣持つたら、悲壮そのものだつたよ。その後S子さんからは、婚約を破棄するの何のつて大さわぎをしたがね、結局家の方に敗けてそのまゝ納まつて了つたが」

「大方そんなところが落ちなんだ。君がいくら精神的結合だなんて威張つても、精神は物質の前には非常に無力なものになつて了ふんだ。まして封建色の拭ひ切れぬ日本の現在では、結婚は家庭的な大事件だし、まだ財産が第一條件だと思つてゐる人が多いんだからね。」

「それを打破するのが吾々の務めぢやないか。」

「そりやそうだけど、金さへあれば、何でも出来る世の中だからなあ、君があれだけ精神を込めてやつても、その始末だらう。」

「あゝ人間つて何てつまらんものだらう。僕にはもう何も信用出来ん。」

「君はS子さんにばかり拘泥するから、いけないんだ。S子さんの為に君の一生を台なしにされたら、それこそ大変だぞ、そんなスケールの小さいことぢや、困るね」

「僕はS子さんを無理矢理に独占しようなんて思つてゐないんだ。S子さんが僕の心よりはなれてゐるんだつたら、僕はそれでよい。何とも思やしない。だがS子さんは……あれから一年程の間、方々の女性を見たが、ぴつたり来るのは唯一人も居らん。僕を救つてくれるのはS子さんだけだ。それにそのS子さんまでが……」

「何て苛酷な悪戯なんだらう。こんな習慣を守つてゐる間は日本なんて頭が上るもんか」

「どうも取扱ひにくい人間だなあ。もつと目を大きくして世の中を見るんだ。馬鹿だなあ、君は、君は余程暇があるんだぜ、その熱意を勉強に入れるんだ。青年はもつと快活でないといかん。そんなことをくよくよ思ふから、そんな憂鬱さうな顔をせにやならんのだ。憂鬱どころか、まるつきり元氣がないぢやないか、半分死んで了つてゐるぞ、早く病氣を直して、氣晴しに遊びに行かう」

「僕もね、あれがあつてからはつとめて明朗性を養つて来て至極朗らかになつたんだ。性質が一変する程ね、だが、それも馬鹿らしく思つてね。人間の本来の姿つて、孤独寂寥に外ならないんだからね。いくら馬鹿騒ぎをしたつて一時の慰めに過ぎないないんだと思ふんだ。」

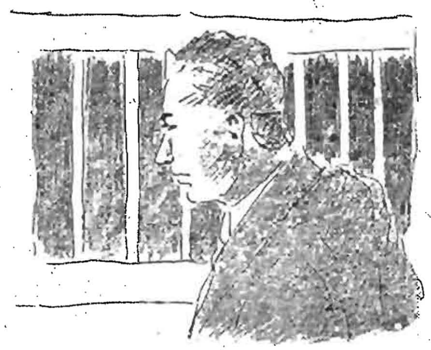
　それに對してT君は何も答へませんでした。私の心の中には、あらゆる幸運と不運とが、かはるがはる思ひ浮かんでゐて悲歎もすれば、安堵も出来るのでした。

　時間はまだ早くありましたが、暮れやすい十一月の空はも早、闇のとばりに包まれ、月の光だけが、硝子越しに二人を照らしてゐました。

ー完ー

心の灯

近藤義康



○○地方裁判所の第五號監房を年若い一紳士が訪れた。

「高野さん。私は愈々明日の公判に辯護人として立つものです。何卒」

「何、貴方が私の辯護人？別に私は辯護人なんて依頼した覚えはない……あゝあなたは官選辯護人ですか」

「イヤ、私は官選ではありません」

「之ゝ、官選でない。して別に頼んだ覚へはなし、私の爲に態々辯護人を附けてくれる様な奇特な人も居ない。それじや、貴方は誰人なんです」

「高野さん。私は誰にも頼まれた事は有ません。敢て申しますならば、私は私に頼まれたのです。詳しい事は後日話すとして、それよりか、あなたの罪を犯した当時の模様を一切話して下さい。」

之に依つて被告の語つた所は次の如くであつた。

或る夜、被告の宅に強盗が入つた。その時、労働組合運営上に就て研究思考中の被告は、單なる物盗と見て、穏かに帰さしめるべく懇諭せんとしたが、兇悪にも強盗は、一挺のピストルを構へて將に発射せんとする態勢にあつたので、今は之迄と、被告は強盗の脳倉に一撃を加へて、不幸にも強盗をして死に到らしめたのである。丁度家人は不在にして此の様子を知る者なく、被告の行動に對して立證する者は誰もなかつた。「死人に口なし」遂に被告は殺人罪で起訴されたのである。

辯護人の訪れた翌日、公判は開かれ、炎熱肌を灼く真夏に法廷は、焼付く暑さであつたが、嚴としてその尊嚴が保たれてゐた。

裁判長、裁判の開始宣言に引続いて検事が痛烈なる論告をなし、一同益々緊張を加へ、続いて辯護に移り、昨日の辯護人徐ろに立ち次の辯論をなし、涙ぐましく美しき逸話を明かにした。

「私は唯今被告高野善男の辯護を致すに当り、被告が強盗の侵入に際し、逆に強盗を死に至らしめたる行爲に殺意ありたるや否や、若し殺意を有せる被告にして斯様な訓面がありや否やと言ふ事に就いて被告の美しき人間愛の一端に就き、御話を申上げ、彼の日常の立派なる行動を明らかにしたいと思ひます。

時、昭和二十二年大晦日、後数時間にして新春を迎へんとする夜遅く、寒気厳しく、人々は外套の襟を立て身を中に屈めつゝ電車、或は汽車に乘らんと急足にて過ぎ行く○○駅構内に、僅か一枚のシヤツ、上にボロボロの汚黒い服を着た、如何にも悲惨な姿をした一人の少年がありました。彼は一心に煙草の吸殻を次から次へと捜しては拾ひ、拾つては捜しつゝ移つて行きました。客は段々と減り、駅も明日の元旦を迎へる可く、一層静かである如く思はれるのでありました。丁度此の時、通りかゝつた一人の紳士、此の姿を認め、暫くじつとその様子を見て居りましたが、つかつかとその傍に近より、「坊ちやん、何を拾つてるの、ウン、煙草の吸殻じやないか、それをどうするの、煙草を欲しけりや、小父さんがいゝのを上げようか」と言つたけれども、その少年はそれを受取らうとはしなかつたのであります。紳士は更に申しました。「坊ちやん、此の寒い晩に煙草の吸殻を拾つてどうするの、何か譯があるんだろう。小父さんに話して呉れないか」少年は善良さうな紳士の姿を見て、涙ながらに語つたのは、次の如くでありました。

「僕のお父さんは此の夏迄は△△溶接株式会社の優秀溶接工として会社から宝の如く大事にされてゐました。然し不圖した事から病気になり、病は段々重くなりました。するとお母さんも看護の爲に倒れ、秋の暮れ、肺炎でなくなりました。今まで親しくしてゐた人も、お父さんが会社を退めてからは、段々と来て呉れる人もなくなりました。お母さんが亡くなつてからは一人も尋ねて呉れる人もありません。お父さんの退職金も瞬く間になくなり、それからは、お母さんが一生懸命看護し乍ら働いて何とかその日の生活をして居りましたが、それも今は出来ません。然し人の物を盗む事は絶對出来ません。お父さんも『人様の物に手を觸れる様な事があつてはならない』と常に注意します。それで病氣で寝てゐるお父さんに好きな煙草も上げられず、新聞配達や近所の人の使走り等をして戴くお金ではその日にも困るばかりです。勿論病氣のお父さんに御薬一つも差上げられません。それでせめて好きな煙草をと思つて毎日かうして煙草の吸殻を拾つて居るのです。」

之を聴き終つた紳士は「坊ちやん、小父さんにその煙草をお呉んなさい。代りに小父さんがお金を上げよう」と申しました。「エ、小父さん、こんな吸殻を買つてどうするの」「いや、坊ちやん、小父さんはその吸殻が欲しいのじやない、お前さんのそのいじらしい氣持が欲しいんだ」と言つて、幾何かの金を與へ、共に少年の家を訪れたのでありました。紳士は少年の一部始終を語り、色々と激勵を與へて、此の家を去りました。此の同情深き紳士の御蔭で貧しい親子も、どんなにか嬉しい正月、

を迎へた事でせう。斯く申す紳士こそは、今裁きの庭に立ち、殺人罪の名の下に峻烈なる刑を受けんとする被告であります。此の同情深き被告にして斯る殺人と言ふ大それた罪を犯すとは考へられないのであります。而も、本法廷に提示せられたる証拠のピストル中には装填実包五発が認められました。発行当時の状況より察し、之は明かに正当防衛と認め、温情ある御裁きに依り、本弁護人は「無罪」の判決を下され、速刻釈放せられん事を願ふものであります。」

法廷寂として声なく、傍聴席の其処此処から嗚咽の声も流れてゐた。

熱情迸る弁護人の弁護によつて、被告は「無罪」の判決の下に青天白日の身となり、吾が家へと急いだ。

それから数日後高野善男は、詫びる気持一杯で弁護人の宅を訪れた。

「私は実に相済まぬ事を申しました。「やれ、官選だの、やれ弁護人を恨まぬ等と」何と御詫びを申し、且御礼を申上げてよいか分りません」

「いや、御礼を申さねばならぬのは此の私です」

「そ、そ、どうしてですか」

「高野さん。御忘れで御座いますか、大晦日の寒い晩、寒さと飢えに震えつゝ、吸殻を拾集めてゐた少年こそ、此の私です」

「えゝ、あなたが、あの時の坊ちやんですか……」

「あれから数日後、父は戴いた煙草の箱に「高野善男君記念品」と書いて、それをおし戴きつゝ息を引取りました。私はその箱を"常に身より離さず"と言ひつゝ胸の内隠しより古ぼけて壊れかゝつた箱を紙包より取出しながら、「苦しき時は心の刺戟として苦学に苦学を重ねて遂に判事の試験に合格致しました。貴方は、私にとつては恩人です。或日私が○○地方裁判所の検事宅を訪れた時、その書斎の机の上に「高野善男調書」を見ました。私は非常に驚きました。然し所属の異る私にはどうする事も出来ません。そこで私は判事の職を退き、弁護士となつたのです。私が恩人を救ふ道は之以外になかつたのです。私が監房を訪れ貴方の変り果てた姿を見た時、断腸の思ひでありました。当時貴方が官選弁護人だと言はれたのも、貴方の心境としては止むを得なかつたでせう。幸に貴方は無実の罪であり、明らかに之は正当防衛が成立する事を認めた時、吾が事の如く嬉しかつたのです。貴方の誠意が貴方の逆境をして正ならしめたのです」

「いや、誠に御恥しい」

二人は暫く二十数年前のあの夜に想ひを馳せつゝ黙然として感深量の体であつた。

「情は人の為ならず」私は数度となく此の言葉を胸に浮べつゝ、当時の世相人心の乱れてゐた時に、猛き高野氏の心情と、何時迄も恩を忘れざりし舊友徳厚弁護士の逸話に耳を傾けてゐた。庭先には蛍の灯が点々と飛交つてゐた。

—完—

四人の夢

林　熔　二

エー、今晩は、雪の降る中を寒さもいとはず、皆様お集まり下さいまして有難うございます。幸ひ私の宅は、A級便乗で電燈は明かるく電熱器も一キロをつけてゐます。

さあ、ずーとこの火鉢の廻りに来て下さい。萬當君、そんなに後ろの方では寒いですよ、さあさあ近くに寄つて配給砂糖のしるこでも上つて下さい。今日は田舎では七日正月と言つて楽しく遊ぶ日です。餅も少いんですが食べ乍ら、一つ本年の初夢物語をゆつくりと話して戴きましよう。一寸その前に今日お集りの皆様は大岩、萬當、一正、森下の四君で夫々面白い個性の持主だと私は信じてゐます。では先ず年長の大岩君、どうですか。

「『弁証法的唯物論はマルクス・レーニン党の世界観である。之が弁証法的唯物論と呼ばれるのは、その自然現象に対する見方が、その研究方法が、認識方法が、弁証法的であるからであり……』と何処からともなく音読の声が聞えて来る。更に耳を澄ませば『弁証法的方法にとつて重要なのは先づ第一に、与へられた瞬間に堅固には見えるが、既に死滅し始めてゐるものではなくその瞬間にたとひ薄弱には見えようとも発生しつゝあり、発展しつゝあるものである』と聞えてくる。之は度々読んだ言葉であるにも拘らず、何か目新しいものに感じられて、もつともつと深くその声を脳裏によみがえらそうとしても平常の日の如く聞いて来ない。一枚の薄い薄い紙の向うから声がするが、その紙をのけて、はつきりとその言葉の声を聞き取らうと、幾ら手を伸しても紙にとゞかない、段々とその中に声は低くなつて来た。」

一正君は電熱器のコイル中へ煙草の灰を落しながら無言で大岩君の話を聞くともなく聞いてゐたが急に、

「あゝ我が夢の楽しさよ。諸君、夢とも幻とも判らぬあの境地、彼女は来たらんとして来たらず、去らんとして去らず僕の瞳をジート見てゐる。その容姿は正に僕の理想のものでした。僕は呆然としばしわして居ましたが、このチャンス逃すべからずと声をかけました。すると彼女は衣ずれの音も軽やかに近づき、唇も触れんばかりになつて『一正さん。踊らない』勿論、僕は直に応じました。するといともほがらかなリズムが流れて来ました。二人は我を忘れて踊り廻りました。この時の感じなど大岩君や萬當君には話しても判らんでしようね。だけど出来るだけ想像して下さい。いゝですか、踊つて踊つて時の経つのも知らなかつたです。その中に二人とも踊り疲れてソフアーに腰を下し、堅く手をにぎりしめてゐました。そして……」

一正君は自分の言葉によつたかの如く紫煙をゆつくりとのぼらせて、その次を語らうともしません。静そのものゝ一瞬です。

私は未だ二人が残つてゐることに気付き萬當君をうながしました。彼は工学専門書以外は眼を通したことがなく、社会

とは、研究室以外はないと言ふ男。

「工学者の夢、百年後の日本、近代科学の夢。頭には試験管と原書以外に何もないのだ」

若虫をかみつぶしたような顔から吐き捨てるような言葉、無口で実験に熱中し正月も元旦の十時には研究室に居たのだから、これも尤もなことでしょう。

「夢なんて何のために見るのだい。この世の中で明日の事も判らぬ人間共が、何をくよくよ思ったり、手のとどかぬ空想をして楽しんだりするのだい。全く以て僕には理解出来ぬよ。僕達の眼前には食難、住難、衣難、煙難、日難、酒難、友達難、灯難、燃難、盗難、等々難づくしなんだよ。これらに眼をつぶって、自ら打開しようともしない。そして過去の輝しきことを夢み現在を逃避せんとして、夢の世界に喜悦を感ずる、これが人間なんだ。女来たれば、女と遊び、酒あれば酒をのむ。自の及ばざるものを求めて、日々あくせくするのはよし給へ。人間到る所に青山あり、僕の夢は現実の夢。現実こそ僕を鍛へ僕を作るものなんだよ」

森下君は物にこだはらぬ性質そのままに、今日も淡々としたものです。

そこで私は一人一人の顔を見廻べました。自煙草をうまそうに吸ひながら、夫々の思ひに耽を耕めてゐました。

そして自分の将来に希望を持って、冬の寒さも知らぬが如く頬を紅潮させてゐました。

——終——

編集後記

會と會誌。これ程切つても切れない重要な関係と深い意義とをもつている。研究、創作の発表、會員相互の連絡。意見の交換等あらゆる面で、會誌のもつ意義は大きい。その意味で我々槐樹會も立派な會誌をもつているのであるから、もつともつと利用されねばならぬのではなからうか？

兎角昔から理工科系統の学生は余り書かないが、それ故にこそ、こんな機會を捉えて、うまかろうが、下手であろうがどんく書いてみるといふ努力が拂はれても無駄ではあるまいと思ふ。今回はふるつて投稿せられん事を切に願ふ次第である。

何れにせよ我が槐樹會は、昨年九月第一回の卒業生を送りこゝに槐樹も回を重ねて第三號を発行するに至つた事は槐樹会の発展と共に非常に喜ばしい事である。終りにのぞみ、投稿者諸兄に厚く御礼申しあげます。（H・T）

昭和二十三年二月五日　印刷発行（非売品）
槐樹　第三號
発行所　大阪市都島区東野田町九　大阪大学工学部溶接工学科　槐樹會
印刷所　大阪市・城東鎌倉稲荷東半丁　アルプス社